メリサンド　（小刀を彼女に與へながら）さあ、もう一挺のを。

アルヂアン　有難う！

（彼女は最後の繩の一捲を切る。沈默。彼女らの心臟の鼓動が聞える。パーブ・ブリユウは自由の身になつたのを感じて、やゝら坐姿に起き直り、腕がまだ麻れてゐるので、思ふようにするやうにと手が動かす。やがて彼は、自分のまわりに、ぢつと默つてゐる女達を一人々々凝視する。それから壁に凭りかゝつて眞直ぐに立ち、怪我した手を眺めながら、身動きもせずにぢつとしてゐる。）

アルヂアン　（彼に近づいて）さようなら。

（彼女は彼の前額に接吻する。パーブ・ブリユウは彼女を引きとめやうと本能的な動作をする。彼女はやさしく身をはづし、乳母を連れて扉の方へ進む。）

セリセット　（その跡を追つかけ、彼女を引き止めながら）　アルヂアンさま、アルヂアンさま。どこへいらつしやるのですか。

アルヂアン　こゝからは遠い、遠い、ずつと向ふの下の、わたしを靜かに待つてゐる所へ……セリセットさん、あなた御一緒にいらつしては？

セリセット　妾もですつて？　でも、いつお歸りになるのでせう。

アルヂアン　わたし歸つては參りませんの。

メリサンド　おゝ、アルヂアンさま！

アルヂアン　メリサンドさん、あなたお出でになりますか。

（メリサンドはアルヂアンとパーブ・ブリユウとを、左顧右眄してゐて、返事をしない。）

おゝ、あの開いてゐる扉をご覽なさいまし、遠くの青々した丘を！　イグレーヌさんお出でになりませんこと？

（イグレーヌは顔を振向けない。）

もう月と星とが、どの道にも照つてゐます。そしてあなたは、ベランヂエルさん、お出でになりませんか。

ベランヂエル　（簡單に）　いゝえ……

アルヂアン　アラヂンさん。わたし、獨りで出て行くのですわね。

（かう言はれてアラヂンは、アルヂアンの方へ駈けて行き、痙攣的に嗚咽しながら彼の腕に身を放げて、

長い熱狂した抱擁をする。）

アルザアン　（交る交る抱擁しながら涙に暮れて、物柔かに自分の身を離なす）　あなたも留まつてゐらつしやるのね、アラヂンさん！　おゝ、幸福にゐませ！　では、ご機嫌よく……

（彼女は乳母を連れて急いで出てゆく。五人の女達は互に顔を見合し、やたら頭をあげるバーブ・ブリュカを見遣る。ベランヂエルとイグレーヌとは肩をすくめて、扉を閉めにゆく。沈默。）

――幕――

闖入者

エドモンド・ピカルド

に捧ぐ

人物

祖父（盲人）
父
叔父
三人の娘
慈恵院の尼
下女

場面は現代

古い田舎家の陰鬱な一室。扉が上手にも、下手にも一つづゝありて、一隅に小さい隠れ戸。奥手に絲の勝つた色硝子の窓あり、一枚の硝子戸は臺地の方に開いてゐる。片隅に大きい和蘭の懸時計。火の點つてゐる洋燈一つ。

三人の娘　こゝへいらつしやいましよ、お祖父さま、洋燈の下へお坐りなさいましよ。

祖父　こゝはあんまり明るくはなさ相だねえ。

父　臺地（テレース）へ出てみませうか、それとも部屋の中にゐませうか。

叔父　こゝにゐた方がよくはなからうかな。この間中ずつと雨が降りつゞいておつたので、夜は濕つぽくつて、寒いよ。

長女　けれど、星が出てゐますわ。

叔父　おゝ、星が――ぢやあ、どうでもいゝ。

祖父　こゝに居る方がいゝんだよ、どんな事が起るか分らんからな。

父　もう心配する事はないのですよ。あれは危險を通り過ぎたんですから……

祖父　わしにはあんまりよくないやうに思はれるがなあ。

父　どうしてそんな事を仰しやるんです？

祖父　あれがさう言つてゐるのが聞えるのぢや。

父　けれど先刻、お醫者は、大丈夫だつて言つてゆきましたが……

叔父　ねえ、全く、お舅さんは無暗に私達を、驚かしたがるんだよ。

祖父　わしには、お前達が見るやうに物事が見えないんだよ。

叔父　ですから、目の見える私達にまかせておゝきなさい。義姉さんは今日の午後から大變いゝやうでした。義姉さんは今、靜かに眠つてゐるのです。ですから、私達に初めてめぐつてきた樂しい晩を、徒らに失はないやうにしませう。……私達は安心してゝもいゝように思ひますよ、さうして今晩は何にも心配しないで少し位笑つたつてね。

父　そうだとも。今夜は初めて、あの恐ろしい出産からこのかた、自分の家族の中にゐるやうな氣樂な氣がしてゐる。

叔父　一度病氣が家へ這入つてくると、まるで見知らない人が家族の中にゐるやうだね。

You are quite right

父　それで、あなたもまた、身内の他には、頼りになる者は一人もないつていふことが分つたらうがな。

叔父　全くその通りさね。

祖父　どうして今日は、あの哀れな娘に會ふことができないのだらうなあ。

叔父　醫者が止めて行つたといふことは、あなたもよくご存知ぢやありませんか。

祖父　いつたい、どう考へたのぢやらうなあ。

叔父　御心配には及びませんよ。

祖父　（下手の扉の方を指して）あれに、わし達の話が聞えやしまいな。

父　それほど大きな聲で話をしてゐるのではなし、それにまた、扉は非常に厚いし、慈惠院の尼も附添つてゐるんですから、あんまり騒々しいようなら、注意してくれませう。

祖父　（上手の扉を指して）赤ん坊には聞えやしまいな。

父　いゝえ、いゝえ。

祖父　眠つておるんだね。

父　さうでせうよ。

祖父　誰か行つて見て來た方がよからうぜ。

叔父　あの赤ん坊は、義姉さんよりよつぽど心配をかけますね。生れてから四五週間になるんですけれど、殆んど動きもしなければ、今だに一聲も泣かないんですもの。全く蠟人形のやうですものね。

祖父　あの子は聾だらうとわしは思ふがのう。それとも啞かしら……從兄妹同志が結婚して出來た子だからなあ……（非難するやうな沈默）

父　あの子が母親を苦しめたんだと思ふと、私はほんとうに腹が立ちますよ。

叔父　道理をよく考へて貰はなくてはならない。それは、あの可哀想な赤ん坊が惡いんぢやないのだよ。——あの子はたつた一人であの部屋にゐるんだね。

父　さうです、醫者がもうあの子を母親の部屋におくのを許さないんですよ。

叔父　けれど乳母は附いてゐるんだらうね。

父　いゝや、乳母はちよつと休みたいといふので歸つて行きましたよ。この四五日來よく豫いてくれたので——ウルスラ、早速走つて行つて、あの子が眠てゐるかどうか見ておいで。

長女　はい。お父さん。

（三人の姉妹は立ち上り、手に手をとつて右側の部屋に這入る。）

父　いつ姉さんは來るのでせう。

叔父　九時頃には來るだらう、と思ふよ。

父　もう九時過ぎです。今晩姉さんが來てくれるといゝんだがなあ。妻が大變逢ひたがつてゐるんだから。

叔父　乾度來るよ。姉さんがこゝへ來るのは、初めてなんだね。

父　今迄一度も姉さんは家へ這入つたことがなかつたんですからね。

叔父　尼寺を出てくるのは、姉さんにとつちや、仲々むづかしいんだよ。

父　姉さんは一人で來るのかしら。

叔父　尼さんが一人、ついてくるだらう。尼さんといふものは一人つきりでは出掛けられないのだからね。

父　けれど、姉さんは住職ですよ。

叔父　規則に上下の差別はないんだからね。

祖父　お前達はもう心配はないのかい。

叔父　何故私達が心配しませう？　そんな事にくよくよする必要はありませんでせうがな。もう、もう何にも心配することはありません。

祖父　お前の姉さんは、お前達より年上なのかね。

叔父　一番上の姉なんです。

祖父　何がわしを苦しめるのか、わしには分らないが、何となく氣が氣でない。お前の姉さんが、こゝにゐてくれるといゝんだがなあ。

叔父　もう來るでせうよ。約束したんですからね。

祖父　夜が明けてくれるといゝんだがのう。

（三人の娘再び入り來る。）

父　眠つてゐたかい。

長女　えゝ、お父さん、ぐつすりよ。

叔父　わし達がかうして待つてゐる間に、何かしようかね。

祖父　何を待つてゐるんだい。

叔父　姉さんを待つてゐるんですよ。

父　ウルスラ、誰も來るのが見えないかい。

長女　（窓のところで）えゝ、見えないわ、お父さま。

父　さうして、並木道にもかい――並木道は見えるだらうね。

娘　えゝ、お父さま。月が照つてゐるので、並木道が糸杉の森のあたり迄見えてよ。

祖父　さうして、誰も見えないのかい、ウルスラ。

娘　誰もよ。お祖父さま。

叔父　お天氣はどんな具合だね。

娘　大變いゝお天氣ですわ。ナイチンゲールの啼いてゐるのが聞えるでしよ。

叔父　成程、さうだな！

娘　並木道に少し風が出てよ。

祖父　ウルスラ。並木道に少し風がだと？

娘　えゝ、木立が少しざわめいてゐますもの。

叔父　姉さんがまだ來ないとは驚くね。

祖父　ウルスラや、もうナイチンゲールが聞えないのう。

娘　きつと誰か庭へ這入つてきたんですわ。お祖父さま。

祖父　誰だらうなあ、

娘　わたしには分りません。誰も見えないんですもの。

叔父　誰一人ゐる筈がないがなあ。

娘　庭には誰かゐるに違ひありませんわ、ナイチンゲールが一時にみんな啼き歌んでゐるんですもの。

祖父　でも、足音が聞えないのう。

娘　誰かゞ池の傍を通つてゐるに違ひありませんわ。だつて白鳥（スワン）が驚いてゐるんですものね。

別の娘　まあ、池の魚がみんな急にもぐり込んでしまつてよ。

父　お前達には誰も見えないんだね。

娘　誰も。お父さん。

父　だが、まだ池には月が射してゐるがなあ……

娘　え、、白鳥が騒ぎ廻つてゐるのが見えますわ。

叔父　白鳥を驚かすのは、乾度姉さんだよ。姉さんは木戸から這入つてきたに違ひない。

父　どういふわけで犬が吠えないのだらうねえ。

娘　番犬は犬小屋の裏にゐますの——白鳥が向ふの岸へ渡つてゆきますわ……

叔父　姉さんを怖がつてゐるんだ。わしが行つて、見て來よう。（呼ぶ）姉さん！　姉さん！　姉さんですか。——誰もゐない。

娘　誰か乾度庭へ這入つてきてゐるのよ、見えるでせう。

叔父　けれど、姉さんなら返事をする筈だがなあ。

祖父　ウルスラ、またナイチンゲールが啼き出したんぢやないかい。

娘　野原中にはもう一匹だつて啼いてゐるのが聞えませんよ。

祖父　さうしてもう何にも音がしないのう。

父　臨終のやうに靜かですね。

祖父　白鳥や魚やナイチンゲールを驚かしてゐるのは、誰か他の人なんぢや。自家の者だつたら、靜かにはしておらんだらうからな。

娘　大きな枝垂れ柳に一匹ゐますわ——あら、逃げちやつた！……

叔父　どうしてまだ、そんなナイチンゲールの事などとやかく話してゐるんだ？

祖父　ウルスラ、窓はみんな開いてゐるのかい。

娘　硝子戸は開いてゐますわ、お祖父さん。

祖父　冷たい風が部屋の中へ吹込んでくるやうぢやな。

娘　庭に少し風があるのですわ。お祖父さん。それで薔薇の葉が散つてゐますの。

父　さあ、戸をお閉め。ウルスラ。もう遲いよ。

娘　はい、お父さん。――扉が閉まりませんわ、お父さん。

他の二人の娘　わたし達にも扉が閉まりません。

祖父　なんだと、娘達。扉がどうかしたのかい。

叔父　そんな頓狂な聲を出さなくたつていゝんです。わしが行つて手傳つてやりませう。

長女　わたし達にうまく閉まりませんわ。

叔父　濕つてゐるからなんだ。みんなで一緒に押してみよう。……扉の合目に何かはさまつてゐるに違ひない。

父　大工に明日、直させることにしようよ。

祖父　明日、大工が來るのかな。

娘　えゝ、お祖父さん。穴藏の普請に來るんですわ。

祖父　家の中が騷々しいだらうな！……

娘　靜かに仕事をするように言ひつけませう。

（俄かに鎌を研ぐやうな音が外から聞える。）

祖父　（喫驚して）　おゝ！

叔父　ウルスラ、ありあ、何だい。

娘　まるで知りませんわ、庭師でしよう。わたしにはよく見えませんのよ。家の影に居るんですもの。

父　庭師が草を刈つてゐるんだ。

叔父　夜、草を刈るのかしら。

父　明日は日曜ぢやないか――さうだ――草が家のまわりに大變長く延びたからつてわしが注意したからだよ。

祖父　鎌としてはあんまり音が大きすぎるやうぢや――。

娘　家の傍で草を刈つてゐるんですよ。

祖父　ウルスラ、お前に見えるのかい。

娘　いゝえ、お祖父さま、暗い所にゐるんですもの。

祖父　鎌の音にしちや、あんまり大きすぎるやうだがのう——。

娘　そりあ、お祖父さまの耳が非常に敏いからですわ。お祖父さま。

祖父　娘が眼を醒まさなけりやいゝがなあ。

叔父　わし達には殆んど聞えませんよ。

祖父　わしには家の中で草を刈つてゐるやうに聞えるのぢや。

叔父　あれには聞えますまいよ、大丈夫です。

父　今晩は洋燈がよく燃えないやうだな。

叔父　油がきれたんですよ。

父　わしは今朝一ぱい注いであるのを見たんです。窓を閉めてからよく燃えませね。

叔父　火屋が曇つてゐるんだらう。

父　すぐに、よつく燃えるやうになるでせうよ。

娘　お祖父さまが居眠りしてゐらつしやる。お祖父さんは三晩もおやすみにならないんだわ。

父　非常に心配なすんだよ。

叔父　いつもあんまり心配しすぎるんだ。時々ねけが分らなくなるんだらうよ。

父　全く年のせいなんですね。

叔父　わし達だつてあの年頃になつたらなあ！

父　お祖父さんも、もうかれこれ八十ですね。

叔父　だからさ、變になるのも道理だよ。

父　恐らくわし達だつたら、もつと變挺になりませうせ。

叔父　人間はどんな事が起るか、分らないもんさ、お祖父さんは時々變だなあ。

父　お祖父さんは他の盲人と同じさね。

叔父　盲目の人達といふものは、あんまり考へすぎるんだ。

父　あんまり暇がありすぎるんですよ。

叔父　他にする事つて何にもないんだからな。

父　それに、また、慰みといふものもないんですからね。

叔父　それが恐ろしいことだよ。

父　慣れてしまふらしいですね。

叔父　わしには想像がつかない。

父　ほんとうに可哀想なもんさ。

叔父　どこに人がゐるといふ事も知らず、どこから人が來たといふ事も、どこへ人が行くといふ事も知らずに、眞晝と眞夜中、夏と冬との區別ももはやつかないで、……さうしていつでも暗闇なんだ、暗闇なんだ！　…わしならいつそ生てゐない方がま

しだがなあ……絶對に直らないものかしら。

父　どうもさうらしいね。

叔父　だが、お祖父さんは全くの盲目ぢやないんだらう。

父　強い光なら見分けられるんです。

叔父　わし達も眼は大事にしようね。

父　お祖父さんは時々變な考へを持つんですせ。

叔父　面白くないやうな時があるんだな。

父　お祖父さんは一度考へた事ならどんな事でも絶對に言ひ通すんですよ。

叔父　しかし昔は、そんな風ぢやなかつたね。

父　さうです、昔は、わし達のやうに譯が分つてゐました。決してこれつていふ非常識な事は言ひませんでした。全くのところ、殆んどウルスラが、あんなにまで増長させてしまつてゐるのですよ。お祖父さんが言ふ事となると、何でも、はい、は

い、言ふもんだから——。

叔父　はい、はい、言ふのもあんまり好い事ぢやないなあ。お祖父さんに對して誤つた親切さ。

（時計十時を打つ。）

祖父　（眼を醒して）わしは硝子戸の方を向いてゐるのかい。

孫　大變よくお眠みになりましたのね、お祖父さま。

祖父　わしは硝子戸の方を向いてゐるのかなあ。

娘　えゝ、さうよ。お祖父さま。

祖父　硝子戸の所に誰もゐないのだらうな？

娘　えゝ、お祖父さま、誰もゐませんわ。

祖父　誰か待つておるように思つたのぢや。誰も來なかつたかい、ウルスラ。

娘　えゝ、誰も來ませんでしたよ。お祖父さま。

祖父　（叔父と父とに向ひ）で、お前達の姉さんは來ないのぢやな。

叔父　大分夜が更けました、姉さんはもう來ないでせう。姉さんにも困つたものだなあ。

父　あれのことが氣懸りになり出してきた。

（誰か家へ這入つて來るやうな音がする。）

叔父　來たな！　聞えるだらう。

父　むゝ、下階（した）に誰か這入つて來ましたね。

叔父　姉さんに違ひないよ。足音で分るんだもの。

祖父　のろく歩く足音が聞える。

父　隨分そつと這入つてきたものだな。

叔父　病人があるといふことを知つてゐるのでね……

祖父　もう何にも聞えなくなつたね。

叔父　ちきにあがつてくるだらう。わし達がこゝにゐることを、聞くでせうからね。

父　姉さんが來てくれてうれしいね。

叔父　屹度、姉さんは今晩來るにきまつてゐたんだ。

祖父　長くかゝつてあがつて來るのだなあ。

叔父　でも、姉さんに違ひありませんせ。

父　他に來さうな人は誰もありませんからね。

祖父　階下では音がしないのう。

父　下女を呼んで見ませうね。果してどうか、聞いてみなくてはならない。（呼鈴の紐を引く。）

祖父　段梯子にもう音がする。

父　下女があがつてくるのです。

祖父　下女一人ぢやないやうだなあ。

父　あんまりえらい音を立てすぎるからなんですよ、……

祖父　一人ぢやないやうだがなあ。

父　恐ろしくどしどし歩いてくるからなんですよ。あの下女は屹度水腫に罹つてゐるんですよ。

叔父　癒してやるんだね。面倒を見てやるんだね。

祖父　お前達の姉さんの足音がするぞ！

父　下女の足音しか何にも聞えませんが。

祖父　お前達の姉さんだよ！　姉さんだよ！

（隠し戸を叩く音。）

叔父　裏梯子の扉を叩いてゐるな。

父　わしが開けに行つてやらう。あの小さい扉はあんまり音がしすぎるんだからな。わし達が見られないやうにしてあがつてきたい時だけに使ふんですよ。（小さい

扉を少し開ける。下女は開いた外にじつと立つてゐる。）どこにゐるんだね。

下女　はい、こゝにおるのでございます。

祖父　お前達の姉さんが戸口にゐるんだな。

叔父　下女だけしか誰も見えませんがね。

父　下女の外には誰もゐません。（下女に向ひ）家へ這入つてきたのは誰だつたい。

下女　お家へ這入つて來たんですつて？

父　さうよ、今しがた誰か來たらうがな。

下女　誰も參りませんでしたよ。旦那さま。

祖父　あんなに嘆息してゐるのは誰だい。

叔父　下女です。下女が息を切らしてゐるのですよ。

祖父　泣いてゐるんだな。

叔父　なんの、なんの、どうして泣くものですか。

父　（下女に向ひ）誰も今來なかつたかい。

下女　いゝえ、旦那さま。

父　しかし、扉の開く音がしたのだがなあ！

下女　扉を閉めたのは私でございました、旦那さま。

父　開いてゐたのかい。

下女　はい。旦那さま。

父　今時分、なぜ開けておいたんだ。

下女　私知りませんでしたの。旦那さま。私はちやんと閉めておいたんですもの。

父　してみると、誰が開けたのだらうねえ。

下女　存じません。旦那さま。誰か私のあとから出て行つたに違ひありませんわ。

父　注意しなければいけないよ——扉を押しなさるな、どんなやかましい音を立てるか、お前も知つてゐようがな！

下女　けれど、私は扉にさわつちやゐませんよ、旦那さま。

父　だつて、それ、その通りぢやないか、部屋へ這入つて來ようとするやうに、押してゐるぢやないか。

下女　でも、旦那さま。私は扉から三歩も離れておるのでございますもの。

父　ほんとうに、そんな大きな聲で話をしないやうにしてくれ。

祖父　あかりが消してあるのかね。

長女　いゝえ、お祖父さま。

祖父　急に眞暗になつたやうだなあ。

父　（下女に向ひ）もう下りて行つてもいゝよ、しかし梯子段であんまり音を立てないやうにしておくれよ。

下女　梯子段ぢや、私、ちつとも音を立てませんでした。旦那さま。

父　たしかに、お前が音を立てたんだ。そつと下りておゆき、奥さまが目を醒すか

らね。

下女　音を立てたのは、私ぢやなかつたんですがねえ、旦那さま。

父　さうして今時分誰か來たら、わし達は留守だと言つておくれ。

叔父　さうだ、わし達は留守だとお言ひよ。

祖父　（身慄ひして）そんな事を言つちやならない！

父　……姉さんと醫者は別だがね。

叔父　いつ醫者は來るんだらう。

父　宵の中には來られないでせうよ。

（彼は戸を閉める。時計が、十一時を打つのが聞える。）

祖父　あれも這入つて來てゐるんだね。

父　誰がです、えゝ。

祖父　下女がさ。

父　いゝえ、いゝえ、下女は階下へ下りて行きました。

祖父　わしは、あれが卓子の所に坐つてゐると思つたがのう。

叔父　下女がですか。

祖父　むゝ。

叔父　なるほど、お目出度いなあ。

祖父　誰も部屋へ這入つて來なかつたのかい。

父　そりあ、さうですとも。誰も這入つて來ませんでしたよ。

祖父　そしてお前達の姉さんはこゝに來てゐないのかい。

叔父　姉さんはまだ來てゐません。あなたのお考へはどこをうろついてゐるんでせう。

祖父　お前達はわしを瞞さうと思つてゐるんだな。

叔父　瞞すんでつて？

祖父　ウルスラ、どうか、本當の事を話してお呉れ！

長女　お祖父さま！　お祖父さま！　どうなさいまして？

祖父　何か起つておるのだ！……きつとわしの娘が悪くなつたのぢや！……

叔父　あなたは夢を見てゐらつしやるんですね。

祖父　お前達はわしに話さうとはしないんだな！　……わしには、何か起つてゐるといふことが、ちやんと分るのぢや。……

叔父　かういふ場合には、わし達よりよく分るのですね。

祖父　ウルスラ。本當の事を聞かせておくれ。

嫗　だつて、わたし達は本當の事を言つてゐるのですもの、お祖父さま！

祖父　お前は自然な聲で話してはゐないよ。

父　そりや、あなたが嚇かしなさるからですわ。

祖父　お前の聲も變つてゐるのう——お前のも！

父　しかしあなたは氣が變になつてきましたな！

（彼と叔父とは、祖父が理性を失つたことを、互ひに目くばせし合ふ。）

祖父　わしには、お前達の恐れてゐるのがよつく分るのぢや。

父　しかしわし達に、何を恐れることがあるんでせう。

祖父　なぜ、わしをお前達は瞞さうとするのだい。

叔父　いつたい誰が、あなたを瞞さうと思つてゐるのです？

祖父　なぜ、お前達はあかりを消したのだな。

叔父　しかし、あかりは消しちやありません。今までのやうに點つてゐます。

娘　洋燈が暗くなつてゐるやうですわね。

父　わしにはいつもの通りに見えるがな。

祖父　わしの眼には明察があるんぢやよ！　娘達や、こゝに起つてゐる事を話しておくれ！　眼の見えるお前達、どうぞ、話して聞かせておくれ！　わしは限りない暗

闇に、たつた一人かうしてこゝにゐる！　わしは自分の側に誰が坐つてゐるのかも知らない！　わしから二歩離れた所で何が起つてゐるのかも分らない！……おい、おい、なぜお前達は聲をひそめて話してゐるのぢや。

父　誰も聲をひそめて話なんかしておりませんぜ。

祖父　お前達は戸口の所で低い聲で話してゐただらうがな。

父　わしが言つた事はみんなあなたが聞いてゐらつしやる通りです。

祖父　お前は誰かを部屋へ連れて來ただらう。

父　だつて、ほんとうに誰も這入つては來ませんよ！

祖父　お前達の姉さんかな、それとも坊さんかな、——瞞さうなんてしちやいけないぞ——ウルスラ、這入つてきたのは誰だつたい。

娘　誰もよ、お祖父さま。

祖父　わしを瞞さうとしちやいけない——わしの知とる事は知とるのぢやから！　こ

丶に幾人ゐるのだな。

娘　卓子のまわりに六人ゐますわ、お祖父さま。

祖父　卓子のまわりにお前達は、みんなゐるんだね。

娘　さうよ、お祖父さま。

祖父　バウル、お前はそこにゐるのだね。

父　さうですよ。

祖父　オリヴア、お前もそこにゐるのだね。

叔父　さうですとも、さうですとも。わしはこゝに、いつもの場所にゐるのです。冗談ぢやありませんぜ。

祖父　ヂエネエヴイエーフ、お前もそこにゐるのだね。

一人の娘　えゝ、お祖父さま。

祖父　ゲルトルード、お前もそこかい。

他の娘　さうですわ、お祖父さま。

祖父　ウルスラ、お前もこゝにゐるのだね。

長女　えゝ、お祖父さま、お祖父さまの傍よ。

祖父　さうしてそこに坐つてゐるのは誰だい。

娘　あなたの仰しやるのはどこのこと、お祖父さま。——誰もゐませんわ。

祖父　そこさ、そこさ——わし達の眞中さ！

娘　でも、誰もゐないのよ、お祖父さま。

父　全く誰もゐませんぜ。

祖父　だが、お前達には見えないのぢやな、お前達は誰？

叔父　おゝ、まあ、ご冗談を。

祖父　冗談にしようなんて思つちやいけない。わしはお前達に保證するよ。

叔父　それぢや、眼の見える者達をお信じなさいよ。

祖父　（不決斷に）　そこに誰かゐたと思つたがのう……わしはもう長く生きてはゐないように思はれる……。

叔父　なんでわたし達が、あなたを瞞すやうなたくらみをするでせう。そんな事をした所でなんの益になりませう。

父　あなたに本當の事をお話しするといふことは、明らかにわし達の義務ですからね……

叔父　お互に瞞し合つたつて、何の益になりませう。

父　いつまでもあなたに分らないでゐるといふことはできませんからね。

祖父　家にゐたいもんだのう！

父　だつて、あなたはちやんと家にゐらつしやるぢやありませんか！

叔父　わたし達は家にゐないのでせうか。

父　あなたは他人の中にゐらつしやるのですか。

叔父　あなた、今夜は變ですね。

祖父　お前達こそ、わしには變に思へるがなあ！

父　どうしようと仰しやるんです？

祖父　わしには、何が自分を惱ますのか、分らんのだよ。

叔父　何をお取りになるのです？

長女　お祖父さま！　お祖父さま！　何がお望みですの、お祖父さま。

祖父　娘、お前達の小さい手を貸しておくれ。

三人の娘　はい、お祖父さま。

祖父　娘や、なぜお前達は三人とも慄えてるのだい。

長女　わたし達、ちつとも慄えてなんかゐませんわ、お祖父さま。

祖父　お前達はみんな蒼い顔をしてゐるやうだね。

長女　もう遲いんですもの、お祖父さま、疲れたのですよ。

父　お前達はもう寢なくてはいけない。さうしてお祖父さまも少しお休みになつた方がいゝんです。

祖父　今夜は眠れない！

叔父　醫者ならばわたし達が待つてゐませう。

祖父　本當の事をわしに知らせておいておくれ！

叔父　だつて、本當の事つてないんですからな！

祖父　だから、わしにはどんな事になつてゐるのか、分らんのぢや！

叔父　ほんとうに、ちつとも何にもないんですよ！

祖父　わしはあの可哀想な娘に會ひたいんだがなあ！

父　しかしそんな事はできないことだといふことは、あなたもご存知でせう。無暗に眼を醒まさせちやならないんですよ。

叔父　明日お會ひなさいな。

祖父　あれの部屋に音がしないのう。

叔父　音がするようぢや、心配ですよ。

祖父　わしがあれに會つてから、もう長いことになるなあ。……昨夜わしはあれの手を握つたが、あれを見ることは出來なかつた！……わしにはもう、あれがどんなになつてゐるか、分らない……どんな具合になつてゐるか、もうわしには分らない……わしはもうあれの顏に親しみがないのだ……あれはこの二三週間の中に變つたに違ひない……わしはこの手で小さな頰骨の出てゐたのに氣がついた……あれとわしとの間には、さうしてお前達との間にもまた、暗闇があるばかりで、外に何にもないのぢや！……このやうにしてわしは生きてゆくことはできない——これぢや、生きておるのではない！……お前達はみんな、そこに大きな眼をしてわしの潰れた眼を眺めながら坐つてゐるが、誰も憐れに思つてはくれない！　……わしには、何が自分を惱ましてゐるのか分らはい。……誰一人わしに話してくれなくてはならない

事も話してはくれない……さうしてすべての事は、お前達がそれを夢見る時に驚かすのぢや！　……だが、なぜ、お前達は話してくれないのだい。

叔父　わたし達をあなたがお信じなさらないからには、何とお話したらいゝのでせう？

祖父　お前達は、自分達自身を裏切るのを恐れておるのだのう！

父　ねえ、しつかりして下さいよ。

祖父　長い間わしにこゝでお前達は何かをかくしておるのだなあ！　……何か家の中には起つておるのだ……だが、今となつてわしに分り出してきたよ……あんまり長い間、わしは瞞されすぎてきた！　——だから、お前達は、わしが決して何も知るまいと思つておるんだらう？　——お前達も知つてゐる通り、わしには お前達よりもよく眼の見える瞬間があるのだ！　……幾日も幾日も、お前達は首縊りをした人の家にゐるやうに囁き合つてゐるのが、わしに聞えないことがあるものかね——

わしは今晩知つてゐる事を、強ひては言ふまいよ……けれどもわしは今に本當の事を知るだらう！　わしはお前達から本當の事を聞くのを待つておらう、だがお前達がかくしてゐたにも拘らず、わしはずつと前から知つておつたのぢや！　——さうして今お前達はみんな死人よりも蒼白い顔をしてゐるやうな氣がする！

三人の娘　お祖父さま！　お祖父さま！　どうなすつたの、お祖父さま。

祖父　娘達、わしの話してゐるのはお前達の事ぢやないのだ、違ふのだ。お前達の事を話してゐるんぢやないのだよ。……もしお父さんやお叔父さんが傍にゐなかつたら、お前達は本當の事をわしに話すだらうといふことを、わしはよつく知つておる！……それにお父さんやお叔父さんはきつと、お前達までも瞞しておるのぢや……お前達に分らうがな、娘達、分らうがな！　……お前達三人が啜り泣いてゐるのがわしに聞えない筈があらうか。

叔父　兎に角、わしはこゝにかうしてはゐられません。

父　ほんとうに妻は、そんなに悪いのかなあ。

祖父　お前達はもうわしを瞞さうとしても駄目だぞ。今ではもう遅すぎるし、それにわしはお前達よりずつとよく本當の事を知つてゐるんだからのう！……

叔父　しかし結局、わし達は盲目ぢやないのです、さうぢやありませんか。

父　あなたは、あなたの娘の部屋に這入りたいんですか。その誤解は溶けるにきまつてゐます――いかゞです？

祖父　いゝや、いゝや、今は行かない……まだだよ……

叔父　ねえ、きつと、あなたはどうかしてゐるんですよ。

祖父　人間といふものは、生れてから言ふことのできなかつたことを、みんな知らないでゐるのぢや！　……あんな音を立てゝゐるのは、いつたい誰だね。

長女　洋燈がゆらいでゐるんですわ、お祖父さま。

祖父　ひどくゆらぐやうぢやな――ひどくゆらぐのう。

娘　寒い風がさわがすのよ……あんなにさわがすのは寒い風なんですわ……

叔父　寒い風なんぞちつとも吹かない。窓が閉めてあるんだからね。

娘　消えさうよ。

父　油がきれたに違ひない。

娘　消えてしまつたわ。

父　わし達はこんな眞暗な所にゐられやしない。

叔父　どうして、ゐられないのだ。わしはもう慣れてしまつてゐるのだ。

父　妻の部屋にはあかりがあるぜ。

叔父　醫者が來たら、すぐ持つて來ようね。

父　ほんとうによく見える。外からのあかりで。

祖父　外が明るいのかい。

叔父　こゝよりは明るいのです。

叔父　わしなら暗闇の中で話してゐる方がいゝんだけれど。

父　わしだつてさうですよ（沈默。）

祖父　時計がいやに五月蠅いやうだな！　……

長女　わし達が今話してゐないからですわ、お祖父さま。

祖父　だが、なぜお前達はみんな默つてゐるのぢやな。

叔父　何からお話したらいゝんだらう？　――あなたは今晩、眞面目ぢやありませんね。

祖父　部屋が大變暗いのう。

叔父　たいして明るくもありませんね。（沈默。）

祖父　氣分がよくない。ウルスラ。少し窓を開けて貰ひたいのう。

父　さうだ、娘や、窓を少し開けなさい。窒息しさうになりだした。

（娘は窓を開ける）

叔父　きつと、あんまり長く閉ぢ込めておいたからですね。

祖父　ウルスラ、窓を開けたのかい。

娘　え、、お祖父さま。からりと開いてゐてよ。

祖父　誰だつて開いてゐると思ふ者はあるまいな、外の音が聞えてこんからなあ。

娘　さうね、お祖父さま。ちつとも音がしませんのね。

父　この靜けさは普通ぢやないよ！

娘　天使の足音でも聞えてよ。

叔父　これだからわしは田舍を好かないのさ。

祖父　何か音がするといゝなあ。ウルスラ、何時だい。

娘　もうおつゝけ、十二時よ。お祖父さま。

（こゝで叔父は部屋をあちこら歩み初める。）

祖父　あんなに歩き廻つてゐるのは誰だな。

叔父　私です！　私です！　驚いちやいけませんよ！　ちよつと歩いてみたくなつたんですよ。（沈默。）――だが、もう一度腰を下します――どうも、歩いてゆく見當がつきませんからな。（沈默。）

祖父　どこか他の所にゐたいものだな！

娘　どこへ行きたいんですの、お祖父さま。

祖父　どこか分らないがの――別の部屋へ――どこでも關はないのぢや！　どこでも關はないのぢや！　――

父　どこへ行かれるものですか。

叔父　どこへ出掛けるにしてもあんまり遲すぎますよ。

（沈默。彼らは卓子のまわりに身動きもせずに坐つてゐる。）

祖父　あの聞えてくるのは何だな、ウルスラ。

娘　何にも聞えませんわ。お祖父さま。木の葉が散つてゐるのですよ。えゝ、さうよ、臺地に木の葉が散るのですわ。

祖父　ウルスラ、窓を閉めてきておくれ。

娘　はい、お祖父さま。

（彼女は窓を閉め、歸つて來て、膝をかける。）

祖父　わしは寒い。（沈默。三人の姉妹、互に接吻し合ふ。）今聞えたのは何だな？

父　三人の娘が互に接吻し合つてゐるのですよ。

叔父　今夜はみんなが大變蒼い顏をしてゐるやうだね、（沈默。）

祖父　ウルスラ、今聞えたのは何ぢやな。

娘　何んでもないのよ、お祖父さま、わたしが手を握り合はしたのですわ。（沈默。）

祖父　あの聞えるのは何ぢや、あの聞えるのは何ぢや、ウルラス。

娘　分りませんわ、お祖父さま。多分妹達が――少し慄へてゐる音なんでしよう。

祖父　娘達、わしも矢つ張り心配なのだ。

（こゝで色硝子の隙から月光が射し込む、そして部屋の此處彼處に異樣な光りが散る。時計十二時を打つそして最後の一つを打つ時に、誰かゞ大急きで立ち上るやうな非常に漠とした音が、何となく聞えるやうに思はれる。）

祖父　（殊更恐怖に身慄ひして）　立ち上つたのは誰だい。

叔父　誰も立ち上つた者はありませんよ！

父　わしも立ち上りませんでしたぜ！

三人の娘　わたしもよ！　……わたしもよ！　……わたしもよ！

祖父　誰かが卓子から立ち上つたのだ！

叔父　洋燈をお點けよ！

（こゝで俄かに驚いたやうな悲しい泣聲が、上手の子供部屋から聞える。この泣き聲は幕の下りる迄、恐怖の度を强めながらつゞく。）

父　お聽きよ！　あの子供を！

叔父　あの子はこれまで泣いたことがなかつたんだがね！

父　行つて見よう！

叔父　あかりを！　あかりを！

（この瞬間に、あわてた重い、急ぎ足の音が下手の部屋に聞える――やがて死のやうな靜寂――扉がそろそろ開いて、次の部屋から光りが、彼らの待つてゐる所へ差し入る迄、彼らは唖然とした恐怖に耳を傾ける。熱塞院の尼が僧職の黑い長上衣を着て、閾の上に現はれ、妻の死を知らせるために十字を切りながら頭を下げる。彼らは了解する。そして躊躇と恐怖との瞬間の過ぎた後、默々として死の部屋へ這入る。その間に叔父は三人の若い娘を通すために、慇懃に戸口階段の方へ姿を消す。盲人は一人殘り、立ち上つて、暗闇の中の、卓子のまわりを感激して盲目滅法に搜し廻る。）

祖父　お前達はどこへ行くのだな――どこへ行くのだな――わしの子供達！　――たつたわし一人、殘しておいて！

ベアトリース

尼

人物

聖母（ベアトリース尼に似た外貌）
ベアトリース尼
尼僧院主
エグランティーヌ尼
クレメンシー尼
フェリシティー尼
バルビナ尼
レヂナ尼
ジセラ尼
僧正
ベリードル王子

小さいアレット
乞食、順禮、その他

時——十三世紀。

場所——ルーヴアンの近くの尼寺。

第一幕

「廊下。その中央に尼寺の大きい入口の扉がある。右手に禮拜堂の扉が二三歩で近づける所にあつて、廊下の壁と直角をなしてゐる。その角のところに普通の女の身長（たけ）くらゐな、聖母の像が、凹處の格子の中に封じ込まれて、階段のついてゐる大理石の臺坐の上に立つてゐる。その像は絹と貴い錦襴の法衣で、西班牙風に裝つてあつて、天の王女のやうな觀がある。金で縫取をした巾の廣い帶で腰を卷き、寶石の輝く黃金色の頭紐は、像の肩のまわりに垂れかゝる總髮（ふさげ）を、王冠のやうにしめ括つてゐる。尼寺の扉の左手にあたつて、ベアトリース尼の小房が見える。その小房の扉は少し開いてゐる。白く洗はれた小房には、一脚の椅子、一つの卓子、それから一臺の聖誕圖の寢臺が供へつけてある。時は夜である。聖母

の前には燈明が點つてゐて、その足元にベアトリース尼がひれ伏してゐる。

ベアトリース　聖母さま、お憐み下さいまし、恐ろしい罪に落ちようとしてゐるわたしを。それと申しますのも、あの人が今夜は、今夜は戻つて參りますから、そしてわたしは一人つきりなのでございますから！　わたしはあの人になんと云つたらいゝのでございませう。どうしたらいゝのでございませう。あの人は顔へる手を出してわたしを眺めます、そしてわたしは――わたしはあの人がどんな事を望んでゐるのか分りません。わたしが始めてこの尼寺に來ましてから殆んど四年の月日はたちました――けれどもほんとに、もう六週間經つて、七月が八月に出逢ふやうになりさへすれば、まるつと四年になるのでございます。あの頃はなんにも存じませんでした。ほんの子供でございました。そして今も尙わたしは何も存じませんし、わたしの胸を痛めるこのことをば――この悲しみをば、さもなければこの幸福をば院長様にお訊ねすることも、他の人達にお話しすることもなし得ないのでございます。人の

話によれば、結婚して男を愛するのは許されてゐるとやら。それであの人は、わたしが尼寺を出るとまづ、わたしに接吻もしないうちに、あの人の知つてゐる人で奇蹟を行ふ仙人が、わたし達二人を結びつけて下さるのだと、云つてゐます。わたし達は、罪の誘惑や男のかける罠のことを度々聞いております。しかしあの人はあなたもご存じの通り、他の人達とは違ひます。ずつと前、わたしがまだ小さかつた頃、あの人は日曜日になると我家の父の庭へよく來たものでした。わたし達はそこで一しよに遊びました。わたしはあの人のことは忘れておりましたが、不幸だつた時とか祈りの時とかには、遊んだことをば屢々思ひ出すのでした。あの人は信心深い、賢い人でございます。で、あの人の眼は、祈りに跪く小さい子供の眼よりも優しいのでございます。先夜、あの人は洋燈の下で、あなたの足もとのこゝに跪きました。あなたはご覽になりませんでしたかしら。あなたの息子のやうに見えました。あの人はわたしに話してゐるのに、まるで神様にお話するやうに重々しく微笑んで話しておりま

した。あの人の言ふことに答へることもできず、どうすることもできないわたしに。この通りにわたしはあなたにすつかりお話しておるのでございます。だつて、あなたをお瞞し申すことはできないんですもの。この通りに、わたしはこれで三日間といふものもうこの上は泣けなくなつたほど、憐れな女でございます。わたしがあの人の嘆願を聞くのを拒むならば、あの人は死んでしまふと誓ひました！　さうして、このやうなことは起り兼ねない事だ相でございます、あの人のやうに美しい、背の高い、若い男が戀のために自分の身を殺すといふやうなことは。ある日、世間の人がかういふ話をフランシスとポウルに話しておつたのでございます。果して本當かどうか、わたしは存じません。けれども地上には面倒な事が一ぱいありまして、わたし達には皆目分りません。おゝ聖母様、お聞き下さいまし！　どうしたらいゝかわたしには分らないのでございます！　さうして聖母様。あなたの聖像に差し出したこの震へる手が、明日は地獄の焔の中の、消すに消されぬ炬火にならないといふことを、誰が知つておりませう。

（戸外に騎馬の人達が近づく音が聞える。）

お聽き遊ばせ！　お聽き遊ばせ！　お聞きになりましたか。馬ですわ——澤山の！　おや、止りました！　あゝ、もう、入口に足音が！　もう扉を開ようとしてゐます！

（大扉を叩く音。）

ど、ど、どういたしませう？　聖母様。わたし參りませんわ、參りませんわ、あなたの思召次第で！

（彼女は立ち上つて、扉へ駆けよる。）

ベリードルさま？

ベリードル　（外から）　さうです、早く開けて下さい、ベアトリースさん！　僕です！

ベアトリース　はい、はい！

（彼女は尼寺の扉をからりと開け放げる。すると、頷子（くるまたびら）に長い青の外套を着たベリードルが入口に現

はれる。彼の右手には、寶石の輝く高價な衣服を荷つた子供がゐる。扉から程遠からぬ所に一人の老人が二匹の立派に飾つた馬の馬勒を持つて、木の下をあちこち遠れて歩いてゐる。遠くの方には、星空の下に、涯しない月に照らされたる田舍。)

ペアトリース　(進み出て)　あなたはお一人ぢやないのでしゝ、そこにゐるのは誰ですの、木の下にゐるのは。

ベリードル　近く傍へお寄りなさい、怖がらないで！

(彼は敷居の上に跪いて、ペアトリースの法衣の緣に接吻する)

おゝ、あなたがさういふ風にあなたを待つ星の前へ進んでゐらつしやるとき、ペアトリースさん！あなたが震へながら敷居の上へ立つてゐらつしやるときの美しさ！きつとあの星達は盛大な幸福が生れてきたことを知つてゐますよ、さうして、女王の足もとに默つて撒き散された黄金の塵のやうに、あの星達は、僕達が旅してゆく長い、青い道の上に散らばつてゐるのです。いつたい、そりあ、どうしたといふのです？　えゝ！ど、ど、どうしたのです？　おゝ、あなたの足はもはやふらふらしてゐるのですか。逆上せてゐらつしやるんですね。おゝ、否、否、否！僕の腕はあなたを卷き、天下晴れて永久にしつかりと抱きしめるのだ！　いゝえ！　あなたは逃げてはいけません、僕が束縛する愛はあなたを救ふのですから！　おゝ、お出でなさい、お出でなさい。愛がまどろむやうな灯びの薄暗い影を、もう求めるんぢやありません。愛はこれまでに一度も見たことのない光を見たのです。その光の射す光線といふ光線は、愛の勝利に輝いてゐて、われわれの若い心を結びつけ、われわれの運命を護つてくれるのです。おゝ、ペアトリースさん、ペアトリースさん！ご覽なさい。僕はあなたを見てゐる。僕はあなたを見てゐる。僕はあなたの側にゐる。あなたに觸れ、あなたを抱擁し、始めてあなたに接吻するのです！

(かう言つて彼は俄かに起ち上つて、ペアトリースをかき抱き、彼女の唇に接吻する。)

ペアトリース　(縮みあがつて、力なく防ぎながら)　いゝえ、接吻してはいけません！約束をな

すつたぢやありませんか！

ペリードル　（接吻を益々强く繰り返しながら）　おゝ、あれは決して愛の約束ぢやなかつたのです！　愛といふものは必ずしも埒を外さないといふことは言へません、さうして愛人達は約束をばしません。一たびすべてを捧げた者は決して約束するには及ばないのですよ！　愛はいつでも、自分に持つてゐるすべてを與へるものです。そして、もし一遍の接吻を控えるとか止めるとかするやうに約束するならば、その唇の爲した過ちを揉み消すために、唇自身が尙一層、幾百遍もの接吻をされるのです。

（彼女を一層熱烈に抱擁しながら、連れ去らうとする）

行きませう、行きませう！　夜は更けて、空ははや白らみ、さうして馬はいら立つてゐる。さあ、もうたつた一足です、一足降りれば——

（ペアトリースが彼の腕の中に倒れかゝつてゐるのを急に見て）

あなたは返事をなさらないのですね。僕にはあなたの息が聞えません。あなたは腰

を抜かしてゐらつしやる！　行きませう！　さあ、嫉妬い黎明が、幸福に導く道の上へ、金の罠を擴げるまで待つてゐてはなりません！

ペアトリース　（殆んど失神の體で）　いゝえ、まだ、できませんわ！

ペリードル　おや、あなたは蒼くおなりだ！　さうして僕の接吻は悉く、冷たい水の中の火花のやうに、あなたの唇の上で消えてしまふ。あなたの美しいお顏をあげて、もうほゝ笑まふとしないあなたの、いとしいお口を與へて下さい。おゝ！　そのやうにあなたの咽喉を押へつけ、あなたの心を重苦しくするのは、これです、この重い面紗です。これは死のために作られたもので、決して生命のために作られたのではありません！

（徐ろに注意深い動作をもつて、ペアトリースの顏を包んでゐる面紗をはずす。が、まだペアトリースは氣づかないでゐる。やがて最初の頭髮束が垂れ始めて、それから次ぎのが順々に、最後にはみんな垂れ懸つて、放たれた焰の如く急にペアトリースの顏一面にふりかゝる。彼女は眼醒めたらしく見える。）

ベリードル　（夢中の叫び聲で）　おゝ！

ベアトリース　（恰も夢から醒めたかの如くかすかに。）　あゝ、あなた、何をなさいました。ベリードルさま。わたしの手に觸わるこれは何でございます？　わたしの顔を撫でるこの軟かなものは？

ベリードル　（彼女の亂れた頭髪を熱烈に接吻しながら）　そら、ご覽。そら、ご覽！　あなたは自分の情熱で眼を醒して、自分の美しさに壓倒されてゐらつしやるのだ！　ね、あなたは御自身の輝やかしさに絡まれてゐらつしやるのだ！　おゝ、あなたはどれほど御自身が美しいかといふことを、ご存じなかつたのです、僕も知らなかつたのです！　僕はあなたを見たと思ひ、あなたを愛してゐると思つてゐました！　さうだたつた今まであなたは僕の子供らしい夢の中の最も美しい人だつた。僕は今この醒めた眼に、あなたに觸れる僕の手に、今あなたを見ひ出した僕の心に、あなたはあらゆる最も美しいもの〻中でも、最も美しいのだといふことを知つたのです！　あゝ

お待ちなさい、お待ちなさい、お待ちなさい！　あなたはすべてにあなたのお顔のやうでなくてはなりません——まるで女王のやうに、全然自由でなくてはなりません！

（彼は急遽な仕方をもつてベアトリースの法衣を取のける。で、彼女は眞白な毛織の着物をつけて現はれる。そこで、彼がその間に扉の方に合圖をするので、この場面の始めに彼と一緒にゐた子供が、高價な衣裳だの、金色の帶だの、眞球の頸飾だのを持つて近づく。ベアトリースは鋪石の上に跪かうとして打倒れ、自分で拾ひ上げた外衣と面紗との襞の中に顏を隱し、俯伏して啜り泣く。）

ベアトリース　いゝえ、いゝえ！　行かれませんわ——わたし行かれませんわ！

（聖母の足もとへ膝でにじりよつて）

おゝ、ご覽下さいまし、聖母様！　わたしはもう爭ふことができません！　いゝえ、あなたのお助けがなくつてはできないのでございます！　もう、もうわたしは祈ることができません！　あなたがわたしをお見捨てになるならば。

ベリードル　（ベアトリースの方へ急いでゆき、子供から受取つた高價な衣裳を彼女に着せながら）

もう時刻ですよ、ベアトリースさん！　着物をご覧なさい、これから始まるあなたの生活の着物をご覧なさい！　あなたは、僕がかの天帝から救ひ出す奴隷ではなく、僕を幸福に導へてゆく女王です。

ベアトリース　（ちつと跪いたまゝ、聖像の臺坐のまわりにめぐしてある格子に、両手で掴まりながら）聖母さま、お聞き下さいまし！　もうこれ以上言ふことができません、もうちつともお祈りができません！　いゝえ、わたしには只泣くことができるだけでございます。わたしはこれほど迄にあの人を愛してゐようとは、知りませんでした。わたしはこんなにあなたを愛してゐようとも知りませんでした。おゝ、お聽き遊ばせ、ご覽遊ばせ！　わたしがあなたにお願ひいたしますのは、暗示、暗示でございます、御手の暗示、あなたの微笑み給ふお眼の暗示、それ以上何もないのでございます！　わたしは何も分らないほんの娘っ子でございます……あなたは何事によらずお諾き容れ下つて、大變ご親切で、憐み深い方だといふことを、わたしは屢々聞いております……

……

ベリードル　（彼女を起して、優しく彼女を格子から離れさせようと努めながら）　さうです。その通りだ、だつて、聖母様は愛が作つた天國の女王だからね！　鐵で冷たくなるこの優しい手を放して、聖母様のお顔をご覽なさい――決して怒つてなんぞゐらつしやらない。微笑んでゐらつしやる。輝いてゐらつしやる。聖母様のお眼は、あなたの眼に輝く祈りをご覽になつたのです。ちようどあなたの涙が、聖母様のほゝ笑んでゐらつしやるお眼を照したやうです。お願ひなさるのが聖母様で、お赦しになさるのがあなたではないのですか。僕の眼にはあなた方がごつちやになつて二人の姉妹のやうに見えるのです。で、こゝには、あなた方の間には愛があることを僕は知つてゐます。そしてお二人はお互の手を以つて祝福し合つてゐるのです。

ベアトリース　（頭を擡げ、聖母を仰ぎ見て）　人がよくわたしに、あなたは聖母様に似てゐると言ひました。

ペリードル　さあ、ご覽なさい！　かうして、僕の手が微かに光る面紗を擴げてゐるうちに、あなたの髪越しに聖母様のお髪を見てご覽なさい。全く同じ光り、全く同じ惠みの光ぢやありませんか。

（彼が話してゐるうちに、尼寺の柱時計が三時を打つ）

ペアトリース　（不意に立上りながら）　まあ！

ペリードル　三時です！

ペアトリース　わたしが合圖の鐘を鳴らさなくてはならない朝の勤行の時間です！

ペリードル　さあ、黎明は近づいてゐます、窓は蒼く白らんできました！

ペアトリース　夜明け前にわたしは、いつも窓を開け放して、すがすがしい朝の空氣や日光や、小鳥らの唄で、眠りから起きて來たばかりの姉妹達を迎へるのです。あそこに、夜と姉妹達の眠りとが終つたことを知らせるために、鐘を鳴らす綱がございます。あそこには、朝のお勤めをするために、これからはもうわたしの手で開けら

れない禮拜堂の扉と、さうして他の人達が點す祭壇の蠟燭とがございます。こゝには、貧しい人の籠があります、さうです、間もなくあの人達は、こゝへ來て、わたしの名を呼ぶことでせう、が、誰もさつぱり見つからないでせう。さうしてわたしの姉妹達が祈りながら、廣いお部屋の平和と沈默の中で縫つたあの貧しい着物を、わたしが頒けてやる時、いつもあの人達が祝福するこの兩手を、徒らに探し求めるでありませう……

ペリードル　さあ、行きませう、夜が明けやうとしてゐますから。あなたの姉妹達が眼を醒ますでせうから。何だかもう、あの人達の足音が聞えるやうだ……

ペアトリース　えゝ、來ますわ、えゝ、わたしの姉妹達が來るのですわ、あんなにわたしを愛して、あんなにわたしを神聖な者と思ひ込んでゐる姉妹達が！　あの人達はこゝで、卑しいペアトリースが遺してゆく物をすつかり見るでせう。石の上にかけてあるこのペアトリースの面紗と法衣とを。

（微かに彼女は面紗と外套とを取りあげて、聖像の足元の格子の上にそれをかける。）

けれど、いけませんわ、あの人達がわたしに授けてくれた平和の衣を、わたしが足で踏み躙つたと、誰かゝ思つてはなりません。聖母さま——ご覽下さいまし、あなたにこれを捧げます。さうすればあなたは預つておいて下さるでせう。あなたの御手に、わたしの持つてゐるすべての物を、この四年間にわたしがいたゝいたすべての物をのせておきます。こゝへ、わたしの數珠を置いておきます。銀の十字架のついた數珠を。こゝにわたしの掟を。さうしてこゝには、わたしが帶につけてゐた三つの大きな鍵を。これはあの大きい扉を開ける鍵で、これは庭ので、さうしてこれが禮拜堂のでございます。わたしは退々緑色になる庭をもう見ることもありますまいし、抹香の薫のなかで歌ひ慣れた禮拜堂の扉を開けることもありますまい。あなたは何もかもご存じでゐらつしやいます、聖母様、そしてわたしはなんにも知らないのでございます。天上では、何一つ許されないと書いてあるのでせうか。さうして

愛は呪はれてゐて、誰もそれを償ふことはできないと、書いてあるのでせうか。聞かせて、聞かせて下さい、おゝ、聞かせて下さいまし！　何故といふに、あなたが聞かせて下さらないでは、考へがつかないからです！　あなたが暗示さへして下されば、私は今無駄にはいたしません！　わたしは別に途法もない奇蹟をお願ひしてゐるのではありません。唯それだけなのです、つまり、唯一つの暗示で充分なのでございます、誰にも見えないやうな極く小さい暗示で！　もしあなたの額に眠る灯びの放げてゐる影が、ほんの一線でも動きますなら、わたしは出て行きません！　出て行きません！　おゝ、わたしをご覽下さいまし！　聖母さま！　わたしはじつと、じつと見つめております！　待つております！

（彼女は長い間聖母の顔を見成つてゐる。何もかも動かないで、沈默）

ベリードル　（彼女を抱擁してその唇を熱烈に接吻しながら）　さあ、行きませうよ！

ベアトリース　（始めて彼の接吻を返しながら）　はい！

（お互の腕をからみ合せて二人は、明け方の世界へと出てゆく。扉は開け放されたまゝになつてゐる。間もなく駆けゆく馬の蹄の音が、遠く遠く去りゆくのが聞える。幕が下りる。やがて、尼寺の鐘が高らかに朝の蹄りを告げながら、夜明けの空に聞える。）

―幕―

第二幕

朝の新禱を告げる最初の鐘の音が聞える。すると幕が上る。場面は今度、尼寺の大扉が閉されてゐることや、廊下の中の窓が朝日の最初の光線を入れるために開かれてゐることなのぞいては、前の幕の場面の通りである。幕が上るか上らないに、聖母は長い、神々しい眠りが終つたやうに蘇生して、動かうとしてゐるのが分る。それからしづしづと聖母は臺坐の階段を下りて、格子のところまできて、彼女の華やかな衣と頭髪との上に、ベアトリースが脱捨てゝ行つた面紗と外衣とを着る。それから、彼女は小聲で靜かに歌ひ始めながら、手を差し伸べて右の方に向く、その時、彼女の身振りの合圖で開かれた禮拝堂の扉を通して、祭壇の小蠟燭が見える。その小蠟燭は一つ一つ魔法的に點いてゆく。それから聖歌を唄ひつゞけながら、彼女は燈火の焔を甦らせて、貧しい人々に與へる看物を入れた籠を臺坐の前におき、尼寺の大扉の方へ進む。

聖母　（歌ひながら）

あらゆる罪を
嘆き悲しむあらゆる魂を
星美しき大空より降り充さるゝ

許容(ゆるし)をもつてわれはかき抱く。

愛の心に守らるゝとき
いかなる罪とても滅びざるはなく、
一たび愛の涙の注がるゝとき
いかなる魂とても死滅することなし。

よしや地上の多くの小路に
愛する心踏み迷ふことはあるとも、
愛の涙はわれを捜し出して
正しき道へと導き行くなるべし。

（最後の歌の言葉が段々終りに近づく頃、おづおづ尼寺の扉を叩く音がする。聖母が開ける。すると入口

へ、跣足で、ひどく破れた着物を着た貧しい小娘が現はれる。その娘は扉の柱の裏に半分隠れて、顔だけを出して、驚いて聖母を眺める。

聖母　今日わ、アレット、何故お前、かくれるの、

（狂喜し且つ恐れて、彼女は十字を切りながら近づく）

アレット　どうしてあなたのお衣は、そんなに光つてゐるんでせう？

聖母　夜が明ければ、どこもかも光るのですよ。

アレット　どうしてあなたの眼には、そのやうに星が輝いてゐるのでせうか。

聖母　新る眼の底には、往々星が宿るものですよ。

アレット　どうしてあなたのお手の内にそのやうな光があるのでせうか。

聖母　布施をする人の手にはいつも光りがあるのですよ。

アレット　わたし、獨りでこゝへ來ましたわ。

聖母　あの貧しい人達はどこにゐるのだね。

アレット　あの人達は噂を聞いたので、來ませんの。

聖母　どんな噂をだい？

アレット　ベアトリース様が、王子様の御馬に乘つて、行かれたのを見たつて噂ですわ。

聖母　わたしがあの卑しいベアトリースに似てはゐませんか。

アレット　みんなはあの方を見たつて言つてゐますもの——あの方はみんなの衆にお話しをなすつたんですつて。

聖母　只神様だけはあの人を見もしなければ、あの人の言ふことを聞きもしませんでしたよ。

（腕にその小供を抱いて、その顏に接吻する。）

おゝ、小さい、アレット、今日わたしが接吻できるのは、お前の外に誰もないのですよ。さうです、無邪氣はそれを知つてゐても、わたしを裏切りはしないのです

（子供の眼を覗き込みながら）

かうして見てゐると、なんといふ人間の靈は淨いものだらう！　天使は最も美しいけれども泪を知らない、可哀想な子よ、もゝいゝよ、もういゝよ！そら、お前の眼から涙がこぼれる。いくつこぼれるか、分るでせう！

（彼女は子供を入口におろす）

けれどあの貧しい兄弟達は——あの人達はどこにゐるのだらう、アレット、あの人達のところへ行つて、じれつたい戀の思ひをすつかりお話し。さあ、向ふへ行つて急いで來るやうにと告げなさい。

アレット　（頭を回らして、尼寺から遠くの方を見遣る）　おゝ、ベアトリース尼さま、あの人達が參りますわ——ご覽なさいまし！

（すると實際、貧乏人や、病人や、老衰した者や、小さい子供を連れた女が、おづおづ近づいてくる。そしてベアトリースだと分ると、彼らは驚いて、恐ろしげにためらひつゝ、入口に近寄つて、扉の外に佇

み、ぢつと眼を据へて待つてゐる。）

聖母　（着物の入つてゐる慈善籠に凭れたまゝ）どんな事が起つたのです、皆さん、なぜぢつとしてゐらつしやるのです。さあ、早く！　陽はもう昇りました、祈りの時刻になつてゐます、ぢきにわたしの姉妹達が通るのです。扉は間もなく閉めることになるのですよ、さうなれば、明日まで、布施はもうないわけ。おゝ、ゐらつしやいよ、皆さん！　おゝ、急いで、皆さん、今が時ですわ。

哀れな老人　（進みでゝ）もし、尼さま、わし達は今夜二人の幽霊を見ましたよ……

聖母　（彼女が籠から引き出すと急に跛ゆくなる一枚の外套を與へて）もう夜のまぼろしのことなんぞ想ひ出すんぢやありませんよ。

壁（いざり）　（次に進みでゝ）尼さま、わし達は今夜悪い考へを抱いておりました。

聖母　（別の着物を籠から引き出すと、それが急に寶石に蔽はれてゐるやうに見える。）

お前さん、悟りを開きなさい、今は許される時です。さあ、ゐらつしやい。おゝ、皆さん、ゐらつしやい！

貧しい女　私は、尼さま、母に經帷子が要るのですから……

他の貧しい女　どうぞ、尼さま、私どものこんど生れた子供に……

（貧しい人達は悲しみながら懇深く布施を乞ふ。聖母のまわりに彼らの手を差し出して群がり迫る。籠に凭れてゐる聖母は、光彩を放つ着物だの、きらきらする面紗だの、輝ける亞麻布の衣だのを、籠の中から引き出して、再三再四彼女の手を充す。聖母が籠から使ひ出すにつれて、籠は一層高價な、一層輝やかしい、一層多くの着物で溢れる。跛ゆい織物で、彼らの兩手を滿し、彼らの肩をおほひ、彼らの幼な兒を包んでやり、貧しい人々にその寶を分けて遣りながら、彼女は恰も自分がなした奇蹟に自分で驚つたやうに呼ぶ。）

聖母　おゝ、こゝに、こゝに、皆さん、さあ、さあ！　こゝに雪のやうな經帷子がある。さうしてこゝにある可愛らしい襁褓をご覽！　さうです。こゝに、そら、生命が、死が、さうしてまた生命が！　さあ、みんな、こつちへゐらつしやい！　今は

愛の時間です。して愛とは何でせうか、愛には際限がありません！　さあ、ゐらつしやい、皆さん、ゐらつしやい！　お互に助け合ひませう！　さうしてあらゆる罪を、お互に許し合ひませう！　そして生涯、幸福と泪とを混ぜ合はせて！　お互に愛し合ふのですよ、倒れた人々のために祈るのですよ。さあ、皆さん、こゝへゐらつしやい、一人殘らずみんな！　さあ、みんな、ゐらつしやい！　神様は憎しみがなくて爲した悪い事はご覽になりませんよ。お互に許し合ひませう。許しが屆かない罪といふものは世の中に一つもありませんからね。

（さて茫然として途方に暮れた貧しい人達は、華美な衣物に掩れてゐる。なかには寶石の鳴る着物を、歩く度に浪うたせながら、嬉しさに喚き立てつゝ外に逝げる者もある。又なかにはありがたさに咽び泣きながら、聖母を取卷いてその手に接吻を求める者もある。しかし大部分の者は默つて　恰も神々しい長佈に打たれたやうに、入口の階段の上に跪き、銘々の祈りを呟く。やがて鐘を撞く音が聞えてくる。鐘は不意に空になる。聖母は自分のまわりに込み合ふ貧しい人達を、やさしく退散させて、その後に扉を閉める。）

聖母　靜かに行くのですよ、皆の衆、祈りの時刻ですからね。

（祈つてゐる貧しい人達の呟き聲が、閉ざされた扉の向ふにまだ聞えてゐる。その呟き聲は次第々々に感謝と歡喜との微かな讃美歌になつてゆく。第二の鐘、それから第三の鐘を撞く音が鳴り渡る。廊下の左の端から出て來る尼僧達が、尼僧院主を先頭に立てて、禮拜堂の方へと進む。）

尼院主　（頭を垂れ兩手を胸において、閉めた扉の側に待つ聖母の前に足をゆるめつゝ。）お聞きなさい、ベアトリース尼。今月の朝の祈りは、三時十五分前に鐘を鳴らすことになつてゐるのです。そこであなたは、三日間の斷食をなさい、たゞ一人の母なる聖母様の御足の前で三晩のお祈りをなさい。

聖母　（承諾したといふ最も謙遜な態度で腰を屈めながら）わが院主様、神は褒むべきかな！

（尼僧院主はまた歩み出して、初めには大きい戸口の圓天井の聳へてゐる壁のために彼女に見えなかつた臺坐に達する。そこへ彼女は跪かうとする、と、その時、眼を上げ、蹤くのをやめ、聲高に叫んで持つてゐた本を落し、さうして云ふに言はれぬ驚きと恐れとの身振りをする。）

尼院主　聖母様があらつしやらない！

（尼僧達は不安になり、次には怖しくなつて、尼僧院主の側へ駈け寄つて彼女を取巻き、臺坐の傍で押合ふ。昏迷の最初の瞬間が過ぎ去ると、彼女らは一時に話し合つたり、聲高に叫んだり、痛哭したり、悲しんだりして、順々に罵つたり、怖がつたり、泪に咽んだり、立つたり、跪いたり、平伏したり、或はよろめいたりする。）

尼僧達　聖母様はもうあそこにゐらつしやらない！

聖母様が行つておしまひなすつた！

聖母様の像を盗まれた！

不信心者！

私たちの聖母様、おゝ、私たちの聖母様！

聖物竊取！

尼寺が瀆された！

おゝ、聖物竊取！

私たちの頭上に屋根が落ちるでせう！

聖物竊取！

聖物竊取！

聖物竊取！

尼院主　（高聲に呼びかける）ベアトリース尼！

（聖母は迫み出で、院主に近く臺坐の前に佇む。彼女は聖母の像がいつも立つてゐた場所を見つめてゐる。そしてその落着ける眼と顔は恰も外界から密封されたかのやうに、いはゞ泰然自若とした希望と沈默とに輝いてゐるやうである。）

尼院主　ベアトリースさん、あなたは聖母様を預つておいでゝした。さうして、夜晝起てゝ、この尼寺を恵みの倉にして下すつたり、特別の御守護を貯へさせて下すつたりする聖母様の尊嚴を見張つてゐるのが、あなたの務めでした。あなたの苦しみは

私にも分ります、またあなたの心配もお察します。でも御心配はあなた、無用ですよ！ 神様は私たちの夜番や熱心を、折々狼狽させるやうな企てをなさるものです。しかし返事をして下さい、だつて、聞かせて下さい。あなたはご覽になつたに違ひありませんから。聞かせて下さい。御存知に違ひありませんから！

（聖母は沈默）

返事をなさい！ 聞かせて下さい！ どんな間違ひがあつたのですか、何か不思議なことがあるやうですわ——ちよつとあなたのお顏が輝いてきたやうですわ……それに、この着物はなんです、私たちが着てゐるのとは違ひますのね。え、私の眼の迷ひなんでせうか。あなたを見る人は、前のあなたとは違つてゐると言ふでせう。何です、それ、それ、そこの、あなたの衣の下の、そんなにきらきら輝くものは？

（聖母の衣に觸わる。）

さうです、私の手が觸わると、その半透明な褶が光に燃え立つて流れるこの毛織物は、いつたい何です？

（聖母の衣をかき擴げて、金で縫取した帶を眺め）

おや！ これは何ですか。

（彼女は聖母の法衣をすつかり脫がしてしまふ、そして我を忘れた暴行を加へると同時に、彼女は、聖母の頭髮を掩ふ面紗を攫み取る。ところが聖母はいつもぢつとしてゐて、さながら無感覺のやうで、着物の具合からあらゆる點が第一幕で臺坐にゐた聖母の像とそつくりそのまゝに見える。その光景に、聖母を取卷いてゐた院主や尼僧達は、茫然として言葉もなく、不思議に苦しい瞬間に襲われる。やがてそのなかでも一番早くわれに歸つた尼院主は、絕望的な恐れと呪詛とゆ身振りをして顏を掩ひ、さうして叫ぶ。）

おや！

尼僧達 まあ！ この人、聖像を盜んだのですわ！ お話しなさいよ、ベアトリースさん！ 返事をなさいよ！

悪魔！ おゝ、悪魔！ 壁に氣をおつけなさい！ 竹篦返しを喰ひますよ！

おゝ、氣違ひ、氣違ひ！

おゝ、恐ろしい、恐ろしい！　どんなことになるか分らない！

おゝ、聖物竊取、聖物竊取！　聖物竊取！　聖物竊取！

（尼僧達の間には後しざりしたり、怖がつたり、逃げたりなどする移動が起る。しかし尼院主は手を擧げ聲を出して、彼らを制止する。）

尼院主　皆さん、まあ、お聽きなさい！　いゝえ、騷いではいけません！　私たちは私たちの運命を待ちませう、離れ離なれにならないやうにしませう。私たちは皆の手とお祈りとでもつて、この罰あたり者を圍み、さうして結果として當然生ずるお怒りを鎭めるやうに努めませう！

クレメンシー尼　どうぞ、院主さま、愚圖愚圖遊ばさないやうに！

フェリシテイー尼　私たちは僧正さまを探しに參りませう！

クレメンシー尼　私は僧正さまが禮拜堂の奥をお通りなすつてゐらつしやる所を見ましたわ。

尼院主　あなたの仰しやる通りです。さうです、行つてきて下さい、フェリシテイーさんとクレメンシーさん。早く行つてきて下さい。さうです、早く行つてきて下さい。天使長の劍を喰ひ止め、呪はれた者の勝利を擊退するのにまだそんなに遲すぎないとするならば、私達はどうしたらよいか、僧正さまがよつくご存じの筈。あゝ、あゝ、皆さん、哀れな皆さん！　もう恐ろしいことはありません、それに私達の目は地獄のいとも深い淵をよつく測つたのですもの！

ジセラ尼　（聖母に近づいて）　瀆神！

バルビナ尼　（これ又聖母に近き）　聖物竊取！　聖物竊取！

レヂナ尼　（氣が狂つたやうに）　惡魔！　惡魔！　惡魔！

エグランテイーヌ　（歎はしげに甚だやさしい聲で）　おゝ、ベアトリースさん、いつたいあなたはどうなすつたんですの。

（この聲を聞いて、聖母は振向いて、神々しく愛らしい微笑みを湛えエグランテイーヌを見る。）

バルビナ尼　（エグランテイーヌ尼に向ひ）　あなたを見てゐますわ。

ジセラ尼　氣が附いたやうですよ。

エグランテイーヌ尼　あなたは多分知らなかつたんでしよ——

尼院主　いゝえ、エグランテイーヌさん、あの人と話をしてはいけません！

（この瞬間に僧正らしい衣を着た僧が、二人の尼とおづおづした唱歌隊をつれて、禮拜堂の入口に現れる。）

僧正　お祈りなさい、お祈りなさい！　皆さん、この人のために祈るのです！

尼院主　（跪いて）ご存じの通り、僧正さま……

僧正　（嚴格な聲で）お聞きなさい、ベアトリース尼！

（聖母は凝乎として動かぬ。）

僧正　（大きな聲を出して）ベアトリース尼！

（聖母は凝乎としたまゝ動かぬ）

僧正　（恐ろしい聲で）お聞きなさい、ベアトリース尼！　さあこれで三度私は、生ける神様に代つてあなたを呼んだのですぞ、神のお怒りはこれらの壁のまわりに顫へてゐる——私はあなたの名を呼んでゐるのですぞ！

尼院主　あの人には聞えないのです！

レヂナ尼　あの人が聞かうとしないのですよ！

バルビナ尼　おゝ、なさけない！　おゝ、私たちこそ災難ですわ！

ジセラ尼　僧正さま！　執り成して下さいませ！　私たちを憐れんで下さいませ！

僧正　疑惑はもう盡きた。今私は闇の王子の、憂鬱な誘りと、傲慢の父とを、認めました。

（院主の方へ振向き）

院主さま、あの尼はあなたにお渡しいたします。さうしてかうした男の救免が決し

て愛の神聖な特權を欺かないといふことを心に留めておいて下さい。皆さん。さあ、さあ、罪人を神聖な祭壇の下へ曳ずつて行きなさい。それから天使が腰を屈める神様の前でむしり取つておやりなさい——そこで、聖像から盜んだ衣物や寶石を一つ一つむしり取つておやりなさい。あなた方の帶を締め直し、どの笞もどの笞もしつかりひねりなさい。さうして玄關の柱から、あのごまかし屋の重い鞭と、悲しき懺悔の捧を取つておいでなさい。あなた方の腕が殘酷にもせよ、あなた方の手が無慈悲にもせよ！　それらに力を添えるものは慈悲で、祝福するものは愛である！

さあ、むかふへいらつしやい、皆さん、いらつしやい！

（尼僧達は聖母を引張つてゆく。彼女は平氣で柔順に尼僧達の中を、無頓着に歩いてゆく。エグランティーヌ尼をのぞく外は皆、既に銘々の腰に卷きつけた二重に結べる紐を解いてゐる。彼らは禮拜堂に這入つて扉を閉める。只一人僧正のみが殘つて見捨てられたる臺坐の前に頭を下げてゐる。暫くの間沈默。俄かに言ひやうのない美しい唄が、禮拜堂の扉から漏されてくる。それは聖母の神聖な讃美歌、アヴェ・

マリア・ステラであつて、遠くで天使が歌つてゐるやうに響いてくる。その讃美歌は恰も目に見えない群衆が、彌々無數に加つて、益々熱した力と清淨さとを添へるかのやうに、次第に益々判つきりとなり、近くなり、强くなる。同時に禮拜堂の中から、倚子のひつくり返る音だの、燭臺の落ちる音だの、僧座のごたすた倒れる音だの、それからおびえた人の叫び聲だのが聞えてくる。最後には二枚の扉が烈しく打開かれる。そして本堂には、波動したり、榮え渡つたり、廻轉したりしてはそれぞれ消える焰と不思議な光輝が一面に漲つてゐるやうに見える。廊下に射す太陽の光輝より無限に眩ゆい位である。それから、あちこちで夢中に叫ぶヤレルヤとホザンナの聲の中に——狼狽し、悄れ、萎が變り、歡びと超人間的な長れとに氣が狂ひ、益々彼らを有頂天にする不思議な花がこぼれるやうに咲いた枝を兩手に打振りながら、歩行もまゝならぬほど頭のてつぺんから足の爪さきまで生き生きした花環に包まれつゝ、圓天井から降り灌ぐ花瓣のために眼をくらまされて——尼僧達は狹すぎる戸口にどさくさと搖ぎいで、ひどい驟雨に妨げられながらあぶなかしげに階段を下る。その間、一歩毎に、拂つても拂つても花びらは肩に積るばかりである。彼らは今しも眞直に立つたる老僧を取卷き、あとから順々につゞく者は花の海を渡つて、禮拜堂の入口の階段の上に絶えずどさくさする）

尼僧達　（彼女らは禮拜堂から出てきて廊下に一ぱいになり、花の大雨の中で歌ったり、お互に抱擁し合ったりしながら、皆一緒に、そしてあちこちで）

奇蹟です！

奇蹟です！

奇蹟です！

わが父よ、おゝ、わが父よ！

わたしは盲目でございます！

わが父よ、おゝ、わが父よ！

奇蹟です！

ホザンナ！　おゝ、ホザンナ！

おゝ、主はわたし達のぢき傍にゐらつしやいます！　おゝ、天は開かれてゐます！

天使が、私どもを壓倒し、花は私どもを追つかけてきます！　ホザンナ！　ホザンナ！

ベアトリースさんは神聖です！　鐘を鳴らしなさい、おゝ、鐘をお撞きなさい、唐金が碎ける位に！　あの人は神聖です、あゝ、ベアトリースさんは淨いのです、淨いのです！

レヂナ尼　私はあの人の神聖な衣に手を觸れようとしました、すると——

エグランテイーヌ尼　（他の尼達よりずつと嬋しい花を頭に冠つてゐる）　燭がぱつと出て、電光が射しました！

クレメンシー尼　祭壇の天使たちは、私どもの方へ振り向きました！

ジセラ尼　聖徒たちはあの人に頭を垂れて、みんな手を繋ぎ合しました！

エグランテイーヌ尼　そしてあらゆる柱の像が、みんな跪きましたわ！

フエリシテイー尼　天使たちは、みんな翼を擴げて歌ひました！

ジセラ尼　（薔薇の重い花環を振りながら）　さうして生きた薔薇が、あの人の束縛を二つに斷

ち切りました！

パルピナ尼　（百合の馬鹿に大きい莖を打振りながら）不思議な百合が、鞭に咲きました！

フエリシテイー尼　（光り輝く棕櫚の枝を打振りながら）　笞が長い金の棕櫚となつて輝きました！

尼院主　（僧正の足もとに跪いて）僧正さま、おゝ、僧正さま、私は罪を犯しました。といふのは、ベアトリースさんが淨正だつたからでございます！

僧正　（これまた跪いて）皆さん、さうです、皆さん、私も罪を犯しました！過去を顧みて神の道を知りませう！

（この瞬間に、尼寺の入口の扉を叩く音がする。そして聖母が再び、ベアトリースの衣と面紗との貧しい身裝で、人間のような姿をして、禮拜堂の入口に現はれる。彼女は伏し眼に手を組み合せ、階段を下り彼女が進むにつれて立上る花瓣を越え、跪ける尼僧達の間を通つて、何事も起らなかつたやうに、彼女に委ねられてある務めをつゞけながら、扉の方へ行つて、扉を廣く開ける。貧しい、年とつた、悄れた

三人の巡禮が這入つてくる。彼女はそれらの人に低い辭儀をなし、傍の青銅の三脚臺から灌水刷子と銀の水盤を執りあげて、彼らの生氣のない手に默つて水を灌ぐ。）

第三幕

場面は同じ。臺坐の上には聖母の像が、第一幕に於けるやうに立つてゐる。ベアトリース尼の面紗や衣や鍵は格子に懸つてゐる。禮拜堂の扉は開いたまゝで、祭壇の蠟燭が點つてゐる。聖像の前には燈火が燃えてゐ、慈善籠は衣物で溢れてゐる。一口に言ふならば、尼寺の入口の扉が閉つてゐる外は、何もかもベアトリースがベリードルと遁げたその時のまゝである。時は冬の夜明け方である。誰も鐘を鳴らす者がないのに、朝の禱りの鐘の、最後の音が聞えて來て、禮拜堂の入口に、鐘の綱が誰もゐない空中に上つたり下つたりしてゐるのが見える。それから、鐘は鳴りを靜め、沈默がおちる。尼寺の扉をゆつくり叩く三つの音に、その沈默が破れる。三度目叩く音に扉は、誰も開ける者がないのに、蝶番の軋る音もなく、ひとりでに開いて、二枚の扉は白い、寂寞とした、人氣のない村里の前に廣く開かれる。そして入口へ吹き込む雪の卷き風の中を、痩せ悄れて見わけのつかないやうな姿で、逃んでくるのは、以前ベアトリース尼であつた女である。彼女は襤褸に包まれ、もはや灰色になつた髮が、物悲しく顰めた蒼白い額の上に散りかゝつてゐる。傷ついて黑くなつた彼女の眼は、死にかゝつてもはや希望の影をとゞめ

ない人の、遠い無感覺な凝視があるばかりである。彼女は開かれた入口にちよつと立ち止まり、それから誰も見てゐる者がないので、ふらふらと手探りしながら内へ這入る。そして扉によりかゝり、長い間狩り立てられてきた動物のやうな不安をもつて、廊下をちらと眼で見渡す。しかし廊下はがらんとしてゐるので、彼女は一層おづおづした足どりで二三歩ゆくが、ふと聖像を見て、叫び聲をあげる。その叫び聲の中に、救ひ甲斐のない、待ち遠しい望みが混ぢつてゐると、そも誰が言ふか――さうして彼女はその像の足もとに力なく跪きながら身を投げる。

ベアトリース　聖母さま、わたしはこゝにおります！　わたしを逐ひ返さないで下さいまし、今わたしは世界であなたがあるばかりですから！わたしはもう一度あなたにお目にかゝりたいと思つておりました、が、あまり來ようが遲すぎました、わたしの眼は潰れかゝつてゐるのですもの。だつて、もうあなたのほゝ笑みも見えません し、あなたに差し伸すとき、その手は死んでゐるやうな氣がいたします。わたしはどうお祈りするものか、忘れてしまひました、どうお話しするものか、忘れてしま

ひました。さうして――わたしの必要上、何もかもすつかりあなたにお話しなければならないのですが――それは、それはよく泣きましたもので、ずつと前からもう泣くだけの元氣もなくなつてしまひました。お許し下さいまし、おゝお許し下さいまし。決してもうお聞き入れ下さる筈のない名を申し上げましてもね。たつて、さうでもしなければあなたはこの娘をお認めにはならないでせうから。おゝ、わたしの愛と罪と、人々が幸福と名付ける者のすべてが、どのやうな身の上を齎らしたか、ご覽下さいまし！　あなたのもとを去りましてから二十年以上になります。で、もし人を幸福にするのが神の御意志でなかつたならば、慥かにわたしをも神は惡くお取扱ひにはならなかつたのでございます。だつて幸福では――おゝ、幸福ではなかつたのですもの！　このやうにわたしは今日歸つてきたのでございます。けれども何もお願ひするのではございません。何故と申して、その時期はもう過ぎ去つてしまつてゐて、お受けするわたしにはもはや力がないのですもの。私はこゝで、この神聖

な家で死にたいと思つて歸つて參りました。もし、あの姉妹達がわたしの倒れる所に倒れることを許してさへ呉れましたなら。おゝ、屹度、あの人達は知つておりますし！　むかふの町へ下りましてからのわたしの生活の醜聞は、非常なものでございましたから、あの人達も聞き及んでおるでございませう……けれどあの人達は、あの人達は少しつきりしか知りません。何事もすべてご存じのあなたですら、人々がわたしにいたしました意地の悪い事も、わたしが苦しんだあらゆる事もご存知ぢやありますまい。わたしは戀の苦惱を何もかもあの人達に話したくてなりませんけれど！

（あたりを見廻して）

でも、どうしてわたし一人つきりなのでございませう？　ほんとうにまあ、家中をわたしの罪が空にして行つたやうに、がらんとしてゐること……おゝ、誰がわたしの遁げて行つた祭壇の前で、わたしの代りをしてゐるのでせう。誰でせう？　わた

しの足がよごした入口を、誰が番をしてゐるのかしら。
燈火は點つてゐる。小蠟燭が輝いてゐるのが見えます。朝の禱りの鐘が鳴つてもう
夜が明けてしまつてゐるのに、誰の姿も現はれない。
（格子の上に懸つた衣と面紗とを目に留めて）
けれど、こゝにあるは何でせう？
（彼女は少し身を起し、膝でにじり寄つて、面紗と衣とにさはる。）
もはや手に觸わるものが、この世のものか、それともあの世のものか、分らないほ
どわたしの哀れな手は死にかゝつてゐます。けれど、これはわたしが襲して行つた
衣ではないのかしら……二十五年前の……昨日？
（衣を取りあげて、機械的にそれを着る。）
ぴつたり合ふやうだ——けれど、大變長すぎるやうだ。わたしが幸福だつた時には、
わたしが體軀を眞直にして歩いてゐた時には、全くぴつたり合つてゐたのだ。

（面紗を取りながら）
まあ、この長い面紗、これこそ今はわたしの經帷子となるのです。おゝ、聖母さま
神樣のものを盗むことになるかも知れませんが、お許し下さいまし！　わたしは寒
いのです、覆ふものがありません。だつて、この悲慘な着物はもうどうかくしたらよ
いかといふことを知りませんし、わたしのからだそのものも、どこにかくれたらよ
いか、もう分らないのですもの。これらのものを無事に預つておいて下すつたのは
聖母樣、あなたではございませんか、今この恐ろしい時に際して、これらのものを
わたしにお與へ下すつて、わたしを待ち受けてゐるかうした無慈悲な焔を少しでも
ためらはせ、むごたらしくしないやうにして下さるのは、あなたではございません
か。
（足音と扉とを開ける音とが聞える。）
何の音でせう？

（前のやうに、尼僧達が廊下に着いたことを知らせる鐘を三つ叩く音が鳴る。）

何の音でせう？　聖母さま！　扉が開いて、わたしの姉妹達が參ります！　わたしにはできません！　どうしたつて！　おゝ、憐んで、憐れんで下さいまし！　なぜつて、壁がわたしを壓し潰し、光がわたしを窒息させ、さうして恥ぢ、恥ぢ、恥ぢが彫り込まれてある石、その石がわたしに向つて立ち、立ちあがつてくるのです！　あゝ！　あゝ！

（彼女はふらふらとして、像の足もとに倒れる。尼院主を先に立てた尼僧達は、前の幕に於けると同樣に、禮拜堂へ通ずる圓天井の廻廊に沿つて進んでくる。彼女らの多くは大變に年とつてゐる。そして尼院主は腰が曲つて杖にすがり、苦しげに歩いてくる。彼女は今しも内へ這入らうとして、ベアトリースが廊下に身動もせず横はつてゐるのに眼をつける。彼女らは不安さうに、驚きあわてゝ、ベアトリースに駈け寄り、彼女のまわりに集まる。）

尼院主　（一番早く彼女を見つけて）　あゝ、おゝ、ベアトリース尼が死んでゐなさるのです！

クレメンシー尼　天國があの方を授け、そして主があの方を連れてゆかれました！

フェリシティー尼　あの方の冠が用意されたので、天使達が呼んだのです！

エグランティーヌ尼　（ベアトリース尼の頭を持ちあげて支へながら、それに一種の敬虔な畏怖をもつて接吻し）　いゝえ、いゝえ、死んでゐらつしやるのではありません。震へて、息をしてゐらつしやいます！

尼院主　でも、まあ、その顏の蒼いこと！　ね、ご覽、まあ、その痩せかたを！

クレメンシー尼　まるで一晩に十年も歳をとつたやうね！

フェリシティー尼　夜明けまでこの人は、苦しんで、藻掻いてゐたに違ひありませんわ！

クレメンシー尼　さうしてこゝへ、この人を引張りに來た天使の群に背いて、たつた一人で！

エグランティーヌ尼　この人は昨夜もうよほどひどく苦んだのですよ。あの花の奇蹟が

あつてからこのかた、あの不思議なほゝ笑みを眼に湛えてゐたこの人は、顫へて泣いたのですよ。私がこの人の代理を務めるわけにはゆきますまい。この人は仰しやいました、「わたしは待つてゐる。わたしの聖者が歸つてくるまでは」つて。

パルピナ尼　聖者つて何のことですの。

（尼院主は偶然なこの出來事に、眼をあげて、再び据へ附けられた聖母の像を見る。尼僧達は頭を擡げ、ペアトリースの氣絶した體軀を腕に抱へてゐるエグランテイーヌ尼をのぞく外は皆、有頂天になつて叫び聲を擧げながら、臺座の下に跪き伏す。）

尼僧達　聖母様がお歸りになりました！　わたし達の聖母様！　おや、まあわたし達の聖母さま！　それにあらゆる寶石をつけてゐらつしやる！　冠は前より一層輝いてお眼も一層深く、ぢつと見つめてゐらつしやる目差しは、一層お美しいこと！　聖母様は天國からお歸りになつて、わたし達に再び天國を持ち歸つて下つたのです。さうです、あの最も神聖な祈りの翼に載せて……

エグランテイーヌ尼　おや、おや！　もう動悸が聞えなくなつてよ！　おや！

（尼僧達は振り返つて、またもやペアトリースのまわりに集る。）

クレメンシー尼　（彼女の近くに跪きながら）あゝ、ペアトリースさん、あなたはこの貴い奇蹟の日に、あなたの姉妹達のもとを去つてはなりません！

フエリシイテー尼　聖母さまがあなたにほゝ笑んでゐらつしやいます、あの唇が語つてゐるぢやありませんか！

エグランテイーヌ尼　まあ、聞えないのです！　苦しさうにしてゐらつしやるわ。お顔がうつろになつて――

クレメンシー尼　寢床へ連れて行つておあげなさい。さあ、わたし達でむかふの、この人のお部屋へ連れて行つてあげよう。

エグランテイーヌ尼　いゝえ、それよりもこの方を愛し、そして奇蹟をもつて守つてゐらつしやる聖母様のお傍に置いた方がいゝでせうよ。

（尼僧達は僧庵へ這入つて行き、外套やリンネルの敷布を持つて歸つて來る。そしてそれを敷いてベアトリースを聖像の下へ横たへる。）

クレメンシー尼　息ができませんわ！――面紗と衣とを取のけませうよ。

（彼女は自分の患者通りの事をする。そして尼僧達はベアトリースが襤褸をご覽になりまして？

フエリシテイー尼　聖母さま、この濡れた襤褸をご覽になりまして？

パルピナ尼　お、、ほんとうに雪が溶けてこの人は感覺を失つたのですわ！

クレメンシー尼　わたし達はあの人の髪がこんなに白くなつたことを、ちつとも知りませんでしたね。

フエリシテイー尼　このむきだしの足が路ばたの泥でよごれてゐます！

尼院主　静かになさい、皆さん。なぜならわたし達は天國の近くに住んでゐるんですから。この人に觸れる手には、光りが殘ります。

エグランテイーヌ尼　ご覽なさい、あの人の胸が喘いでゐるのですよ！　あれ！　あの

眼が開きかゝつてゐますわ！

（ベアトリースは眼をあげる。少し頭を動かして、あたりを見る。）

ベアトリース　（夢から醒めながらも猶、遠くの聲に惱まされてゐるかの如く）　みんなが死んだのに――わたしの子供達が――死んだのに……どうしてあなた方はほゝ笑んでゐらつしやるです？　あれは飢えて死んだのですよ。

尼院主　わたし達は微笑んでゐるのではありません。わたし達は喜んでゐるのですよ、さうです、あなたが生き返つて下すつたのを見て、喜んでゐるんですよ。

ベアトリース　わたしが生き返つたんですつて！

（いよいよ正氣づきながら、あたりを見廻し）

えゝ、わたし、思ひ出しました、わたしは疲れきつてゐる最中にこゝへ來ましたの。そんなに恐ろしく見つめないで下さいまし。わたしはもう惡口の的にはなりません。今はあなた方の思ふまゝになりますわ。いゝえ、誰にだつて知らせません、も

し誰かに話すのをあなた方がご心配なさるのでしたら――わたし何事も申しますまい。どんな事にでも従ひます。だつてわたしの肉體と魂とはすつかり破られてしまつたのですから。わたし、こゝのこの場所で、しかも聖母さまの足もとで、こんなに禮拜堂に近い處で、こんなにあらゆるものが尊い清淨なもののお傍で、わたしが死ぬことを許していたゞけないといふことは知つております。あなた方はみんな、おゝ、大變善良な人達です。あなた方は忍耐强よくつてゐらつしやいました。さうです。あなた方はいきなりわたしを窓から放り出すやうなことはなさいませんでした。けれど、できることなら、神様もまた許して下さるなら、おゝ、わたしをこゝからあまり遠くへ放り出さなさいで下さいまし！　今となつてはどなたにも看護していたゞかなくてかまひません。どなたにも同情していたゞかなくてかまひません。わたしは大變具合が悪いのですけれど、今はもう、もう苦しくはございません　どうしてわたしをこゝへ寢かせておいて下つすたのです？　こんなに白い美しい敷布の上に

ああゝ！　今のわたしにとつては白い敷布も氣が咎めるばかりです。そして汚れた藁が、死にかゝつた罪人に相應しい寢臺でございます。けれどあなた方はまだわたしをぢつと見つめたまゝ、まだ何とも仰しやいませんのね。それかと云つて腹を立てゝゐらつしやるやうでもございませんのね。あなた方の眼には泪がみえます。またわたしがお分りにならないとみえますわ。

尼院主　（彼女の手に接吻して）　いゝえ、いゝえ、いゝえ！　よつく私たちは、あなたを知つてゐるのです、よつく――あなたを。わたし達の聖者を！

ベアトリース　（一種の恐怖に、手をひつたくるやうにひきこめて）こんな手に接吻なさらないで下さい――さまざまな悪い事をした手ですから！

クレメンシー尼　（彼女の足に接吻しながら）　おゝ、天國から私たちの所へ下つた選ばれたる魂よ！

ベアトリース　いつも罪に走り慣れたこの足に接吻なさいますな！

エグランティーヌ尼　（彼女の額に接吻しながら）奇蹟の冠で飾られたこの淨い額にわたし接吻いたしますわ。

ベアトリース　（手で顔をかくして）一體まあ、皆さんは何をなさるのです？　何事が起つたんです。以前、わたしが幸福だつた時には、決して人は許して呉れませんでした。この額に接吻しないで下さいまし、煩惱と仲よしであつたこの額を！　けれども額にさわつて下すつたあなたは、どなたでございます、聞かせて下さいまし。わたしの疲れた眼の迷ひかも知れませんが、まだ遠眼がきくとしますればあなたはエグランティーヌさんですね。

エグランティーヌ尼　さうです、私ですわ。あなたが愛して下すつたエグランティーヌ尼ですわ。

ベアトリース　あなたに、二十五年前、わたしは不幸だつてお話しましたわね。

エグランティーヌ尼　わたし達の仲間から、二十五年前には、神様があなたをお選びな

さいましたわ。

ベアトリース　そんなことをあなたが仰しやつたつて、あなたのお聲の中には少しの悲哀も潜んではおりませんのね。一體わたしはどうしたのか、推量することができませんの。わたしは弱つて、具合が悪くつて、考へをまとめることができないのですよ——で、仰しやるお言葉がどれもこれも、わたしを吃驚させるのです。わたしは不注意でございました。ねえ、あなたは誤解してゐらつしやるやうです。わたしはあなた、お顔をかくして、十字を切つて下さいまし！　——わたしは、ベアトリース尼なんです

尼院主　えゝ、えゝ、分つてゐますとも！　私たちのベアトリースさんです。私たちの姉妹の、私たちの中でも一番清い、不思議な小羊、天使の敎子、清淨無垢な愛人ですわ！

ベアトリース　あゝ、本當にあなたでしたか。わたしには分りませんでした。院主さま、

あなたは背を眞直にしてお歩きになつてゐらしたものですが、何んといふ今はお腰の屈みましたことでせう！　わたしも矢つ張腰が屈んだのでございます。さうして今はかうして倒れてゐます。さう、さう、わたし、皆さんが分ります。あそこにクレメンシーさんがゐらつしやいますのね。

クレメンシー尼　（頭を屈げて、ほゝ笑みながら）さうですよ、さうですよ。

ベアトリース　フエリシテイーさん。

フエリシテイー尼　（ほゝ笑みながら）は、は、花盛りの禮拜堂から一番早く出てきたフエリシテイー尼ですよ。

ベアトリース　そしてあなたは苦勞をなさらなかつたやうですのね。だつて、悲しさうに見えませんもの。わたしは一番若かつたのですが、今は一番歳をとりましたの。

尼院主　そりゃ屹度、神さまの愛が恐らしく重荷だつたからですよ。

ベアトリース　どういたしまして、院主さま。重荷だつたのは、慎い重荷だつたのは、

殿方の愛でございましたわ。あなた、許して下さいませうね。あなたも許して下さいませうね。

尼院主　（ベアトリースの足もとに跪いて）おゝ、わが娘よ、もし許されねばならぬ者があるとすれば。それは、少くともあなたの足の前にひれ伏すことのできる女ですよ。

ベアトリース　けれど、あなたは、わたしが果して何をしたか、ご存じでゐらつしやいますか。

尼院主　あなたは奇蹟の外に、何んにもなさいませんでした。あなたはあの花の最後の審判の日からこちらへ、わたしの魂の燈火、祈りの香、さうして恵みの源、驚異の門でありました！

ベアトリース　けれどある晩のこと、わたしは遁げたのです、もう二十五年になりますが、ベリードル王子と一緒に。

尼院主　誰のことを話してゐらつしやるのです？　誰のことをあなたは話してゐらつ

しやるのです。えゝ？

ベアトリース　わたしのことですわ！　自分のことを言つてゐるのですわ！　あなたにお分りになりませんか。二十五年前のある晩のこと、わたしは遁げて行きました、が三ヶ月も過ぎると、あの方はわたしを愛さなくなりましたの。それでわたしはすつかり恥じを失ひ、すつかり理性を失つて、あらゆる希望を失つてしまひました。この體軀（からだ）を、神様に不忠實なこの體軀を、人々がそれからそれへ汚しました。さうしてわたしもそれを面白がつて、男に追ひ駈けられておりました。わたしは天國の天使でも一たびそこへ落ちては、その力強い翼で昇ることのできないやうな低い所へ落ちてしまつたのです。さまざまな罪を犯しましたの。わたしは罪そのものを度々濟したことさへある位ですもの！

尼院主　（そつとベアトリースの唇を手で押へながら）　あなた、亡靈が唆かしてゐるんですよ。もう仰しやいますな、高まりくる苦悶があなた自身を、あなたに忘れさせてしまひ

ますからね。

クレメンシー尼　この人は奇蹟で草臥れてゐらつしやるのですわ。

フエリシテイー尼　さうしてこの方は惠みに、閉口してゐらつしやるのですわ。

エグランテイーヌ尼　天國の空氣がこの人をしほれさせてゐるのですわ。

ベアトリース　（も振いて、院主の手を押しのけて坐り直る）　囈言ぢやございません！　いゝえ、實際、さうぢやございません！　これは天國の空氣ぢやなくつて、地上の空氣ですわ、しかも、これは本當なのです！　あゝ、皆さんはあんまり寛大すぎます！　あんまり憐れみ深かくつて、冷靜でゐらつしやいます！　それに、何にもご存じないのですもの！　わたしは、あなた方に窘められた方がましです、けれど、やがてお分りになりませう！　おゝ、皆さんはこゝに住んで、苦行をなすつたり、祈禱を唱へたり罪を贖ふとなすたりしてゐらつしやる。けれど、ご覽なさいまし、この境内の外に住んで、休む場所もなく、この上なく傷しい苦行を終りまでつゞけるわたしや、わ

たしのやうな連中を！

尼院主　お祈りをなさい、お祈りを、皆さん、今が最後の試練ですぞ！

エグランテイーヌ尼　天使達の勝利が悪魔をじらしてゐるのです！

ベアトリース　さうです、さうです、悪魔ですわ、悪魔が優勢なのですわ！　この手をご覽になりまして？　もう人間らしい形をしてゐませんわね。ねえ、もう擴げられないのです。わたしは心も體軀も賣つてしまつてからといふものは、この手も賣らなくてはなりませんでした。もう何も殘つてゐない時には、手まで買つてくれるものでございます。

尼院主（ベアトリースの顏から、流れる汗を拭ひながら）あなたの寢床のまわりで今あなたを見守つてゐる天國の天使達が、あなたの涙の流れる顏の前に、翼を擴げ給ふやうに！

ベアトリース　あゝ！　天國の天使達！　あゝ！　天使達はどこにゐるのでせうか、聞かせて下さいまし。何をしてゐるのでせうか。お話したではありませんか。ねえ、

わたしはもう自分の子供がないのですよ、何故といひますと、三人の最も可愛らしい子供は、わたしがもう綺麗でなくなつた時死にました。そして、一番季の子は、苦勞させたくないあまりに、ある夜心を鬼にして、わたしが殺したのです。それからといふものは、生れやうとしましたけれど、一人も生れませんでした。それでも矢張り太陽は輝いて、星はもとの通りに瞬き、正義は眠つて只最も惡いものばかりが幸福に、しかも誇つておつたのでございます。

尼院主　努力といふものは偉大な聖者であればあるほど、恐ろしいものです。

エグランテイーヌ尼　地獄の火が、狂暴の大きい憤怒を浪費するのは、天國の門の所なのです。

ベアトリース（疲れ果て、仰向けに倒れる）　もうどうなつたつて構ひません——わたし、息が窒る——皆さんがわたしをどうなさらうと。わたしはすつかりお話してしまひました。

エグランテイーヌ尼　天使長がこの方を連れてゆくのですわ。

フエリシテイー尼　天人の群れの密集隊が平和を齎すのですよ。

尼院主　悪夢は遁げてしまひました。さあ、哀れな聖い尼さん。あなたがお話しにならなかつた冒瀆なことをみんな思ひ出しながらもう一度お笑ひなさい。毒々しい聲があなたの唇を冒して、最後の敗北の憤怒にあたり散らしたのですよ。

ベアトリース　あれはわたしの聲でした。

尼院主　わが善良な、聖い尼さん、氣をしつかりなさい、後悔なさいますな。だつて、わたし達の知つてゐる、あの懐しい、やさしいお聲ではなかつたのですもの。天使の指導者、病人のための健康だつたあなたのお聲ではなかつたのですもの。長い年月の間私たち祈禱者を鼓舞して下すつたあのお聲ではなかつたのですもの。

エグランテイーヌ尼　ちつとも心配なさいますな、あなた。いゝえ、その最後の闘ひであなたは、愛と無邪氣と祈禱との生涯の、勝利の棕櫚と王冠とを受け損なふことはありませんよ。

ベアトリース　あの不幸な時からこちらへといふもの、一時間たりとも、わたしの生涯で、恐ろしい罪に汚されなかつた時とてはありませんでしたの。

尼院主　あなた、神様にお祈りをなさいまし！　あなたは最も正淨な方です。が、それでも敵があなたを唆かし、遠慮があなたの本心を迷はさふとしてゐるのですよ。どうしてあなたに、そんな恐ろしいあらゆる罪が犯されませう。あなたがこゝに最も謙遜な下僕として、入口や祭壇の番をなすつてからかれこれ三十年近くになります。あなたの行爲にしろ、お祈りにしろ、すべてあなたには、わたしのこの眼を離しませんでした、ですから、わたしは神様の前であなたの行爲や祈りについて、わたし自身の事のやうにお答へができるのです。でも、私の行爲や祈りが、あなたのそれらと同じやうであつてくれたらいゝのですが！　それはこの僧庵の中の、こゝではなくつて、あちらの、外の、罪が勝利を占めてゐる主のない世界に出て行つてから

のことです。そして、その世界のことは、有がたいことに、あなたは何にもご存じない。あなたは聖殿の影の外へは、一度も出て行つたことがないのですから。

ベアトリース　一度も出て行つたことがないんですつて？　おゝ、わたしはもう考へられません！　あんまり遠い、遠い、遠い昔のことですもの！　わたしはもう間もなく死にます。しかし、本當の事を話して下さいまし。あなた方はわたしを許して下さるのですか、それともわたしに知らさないでお欺しなさるのでせうか。

尼院主　誰も欺く者はありませんし、誰も許す人もありません。私たちはあなたが布施をしたり入口の番をしたりするいろんな賤しい世話や、わたし達の時間を注意深く守つて几帳面に祭壇の前にゐらつしやるのを毎日見てゐたのですよ。

ベアトリース　わたしはこゝにゐます、院主さま、そしてわたしは夢を見てゐるのではございません。この手をご覧なさいまし、爪でひつかきますと、ご覧なさい、血が出てきて流れます、この血は本物ですわ。わたしはこの他に證據がありません。さあ

それで、あなたが憐れと思召すならば、神様のお前で、こゝでお話し下さいまし。人が死ぬ時には神様のお傍にゐるのですから――。もしあなたのお望みとならば、わたしはもう何も申しますまい。でも、憐れと思召して、わたしに聞かせて下さることができますならば、二十五年前のある朝に扉が開けっ放しになつたまゝで、廊下には誰一人ゐないのに氣がおつきになつた時――祭壇がうつちやらかしてあるのをご覽になつた時――この面紗、この面紗と衣とをご覽になつた時、あなたは何と仰しやいましたか、どうなさいましたか？　さあ、聞かせて下さいまし。……院主さま、わたしはもうできません。

尼院主　あなた、分りましたよ、その思ひ出がまだ、あなたを惱まし、あなたを沈ましてゐるのですね。二十五年前、神様があなたをお選びなすつたゝめに不思議な奇蹟が起りましたが。聖母様はそこで、わたし達の所を去つて、再び天國にお昇りになりましたよ。その前に聖母様は御自分の神聖な衣と尊い裝飾品とをあなたに授け

最後に黄金の冠りをあなたに被せ、限りないお恵みを私たちにお示しなつたので、聖母様がお立ち去りになると同時にあなたが、その代りをお勤めになつたのです。

ベアトリース　してみると、誰がわたしの代りをしたのでせうか。

尼院主　いゝえ、誰も代理なんて致しはしません。何故といつて、それからだつてずつと、あなたはこゝにゐらしたんですから。

ベアトリース　こゝに、毎日ですつて？　わたしが皆さんの中にですつて？　わたしが動いたりお話しをしたり、あなたがわたしの手にお觸りになつたりしたのですか。

尼院主　今、あなた、わたしがこの手であなたに觸つてゐるやうに。

ベアトリース　院主さま、わたしにはもう薩張分りません。わたしが思つてゐることをのぞいては、もう理解するだけの力がございません。わたしはまだ柔順です、そしてあなたに何にもお訊ねする事がございません。わたしにはすべてが非常に善いやうな氣がしますの。つまり死が非常にやさしいやうな氣がするのですよ。靈魂あり

が憐れなものだと悟つてゐらつしやるのは、あなたですか――あなたですか。わたしがこゝに住んでゐた時は、こゝに寛恕といふ事はさらにありませんでした。わたしが幸福でなかつた時には、よつくかう言つたものです。もし神様が何にもかも御存知でゐらつしやるものなら、お罰しになることはあるまいと。しかしあなた方は幸福です、そしてそのことをばすつかり知つてゐらつしやるのです。或る時は、人々は苦しみを度外視し、或る時には、罪を犯した者を悉く罵りました。しかし今はすべての人が許してゐて、すべての人が知つてゐるやうです……一人の天使が、殆んど眞理を話してしまつた、とでも言ふやうですわ。院主様、さうしてあなた、エグランティーヌさん、お手を貸して下さいまし――あなた方は、わたしのことを腹立つてはゐらつしやらないでせうね。皆さんに、わたしの姉妹達に話して下さいまし。……皆さんにまだお話しなくてはならないことゝ言つては、いつたい何があるのでせうか。わたしの眼はもう開きませんし、唇はこわばつて參りました。……い

よいよわたしは眠ります。わたしは憎しみと悪意とが何を望むのか分らない世界の中に生きてゐましたが、今度は別の世界で死ぬのです。惠みと愛とが何を欲するか、何を目的とするか分らない別の世界で。

（彼女は疲れ果て、敷布の中へ仰向けに倒れてしまふ。沈默。）

エグランテイーヌ尼　あの方は、お眠りになりました。

尼院主　お祈りなさい、お祈りなさい、皆さん、勝ちを占める時が來るまで！

（尼僧達はベアトリースの寢床のまわりに跪き伏す。）

――幕――

大正十一年一月廿五日印刷
大正十一年二月十日發行

（スチルモンドの市長）
【定價 貳圓四十錢】

飜譯者　山村魏

發行者　東京市牛込區神樂町二丁目十一番地　遠藤孝篤

印刷者　東京市麹町區飯田町一丁目六番地　大杉直次郎

版權所有

發行所　東京市牛込神樂坂通り　振替東京四匿六八七番　文泉堂書店

三島章道著　劇藝術小論集　定價壹圓五十錢　送料八錢

同　劇論と劇評集　近刊

山村魏譯　プーシユキン小說集　定價貳圓　送料八錢

ストリンド・ベルヒ著　同　獨逸中尉　近刊

ゴルドン・クレーグ著　渡平民譯　新劇原論　定價參圓　送料十二錢

同　歐米演劇史潮　定價貳圓四十錢　送料十二錢

506
27

終